發句心得草

乾

中村俊定文庫
文庫 18
985
1

宮内庁書陵部
中村俊定文庫

## 參考 心得肝要の文

連歌も俳諧も參考すべき先春夏秋冬
とて其時節に相當かつ相むかはすべき時
節の遠近をわきまへ然は百一句が
中にも人事とて一句は必ず
阿佛　略　藤原爲相卿の妻
長月晦日或人連歌をすゝめ阿仏に參考に
もとひ給ふ
今日はいかゞ秋の限りにて
いとてはかなく一會滿座にて

又翌日催し給ふ阿仏尼の発句を先文を時
今日は又冬の空のてりもかはらぬ
と書て出したる文を枕ふ云く今日題を発句とも
連句は発句を題目にしたるなり志ゐれいとの
時節を飛遠（ごとく）なるとも
なるとも乞い彼時節を遠（ごとく）
ひとすぢにすり乞等の術初心の学びは
必ず雅の三多の法（しるべ）合点しての上は風姿花
伝（しるべ）先発句は一座の冬頭すれば宗匠貴人殊容
老人等乃外は（しるべ）すべ（しるべ）
に寄ては家道のたとへ（きれ）
発句は主座の明乃景物景色山河江湖等
花花落葉風雲雨露霜雪翁歌虫鳥まで
當意即妙乃風景なりのまふそ云く
云以ふるなり外の秘事とてもなしと
ゆ云ふ事なり
仏尼月次の発句又いかなる兼日なり
知れ多ふ云ふ
ら（しるべ）一句のうちの
ふ云ふ（きれ）
紙を引くとも随分に
長高く遠玄ふ
云葉上中下云ふ（しるべ）て一作は（しるべ）
して句のくさり
ひてゆ云葉のとも

しく作り出さ〜人心難せらし後悔はあるか
との古ものなり狂歌又古事ぶり等おもしだ
うしの人始終吳服東なりきたるとたとへ一句も
作り出さ〜人ゆこもの憂たる筆らして返答はは
いんぐ御〜きこのものへ〜是きこそ必ずし
出すすき〜きこそ世間世俗卑しい発句の限ゆで
きこちり句の附合ふも大〜はたへきこそ
樹じて発句なたへ必一句ふ自問自答の心
ちくてい手句作りて附合のうるはりて発句ゑ云
物ふうるすを時〜の景氣ユこふして切句
の働き第一まりくもの作伸〜ゆいくふ
初やさ〜心たゆこそ風雅なこあてこそはうま

ほ〜れ一句もはぐみ初たれ多くは無
念と云へ〜ゆこそ筆翰たるべし〜狂文
発句は四時のうほりゆく氣色物ゑこは大学
誠りうる一こそはり神祇釈教恋無常哀傷
述懐懐旧祈祷名聞銭別遊宴諧
賛賀古事古歌狂文等色く
時ふとりて品〜行ふてもこそふ徳ふべき
ゑはりかかゆとたはもきこそしゆ〜ては必誠
はる〜徳ゑ心なゆこづめ〜俳なぬぐは〜てこ
きこゑはり文意の発句ゆこふり連句はふ
多くこそ或人のゑ〜もちと徳るべき物に
はすゆこはり俳諧い時の無ふ筆よてまる物

すれい意のうれ多〳〵又さく奉りの姿
の仰いを憂万代ゝとも　新〳〵
かろく　ゆ〳〵　和〳〵うれ
厚く　風なる　剛なる
なるべし　きゝやうれ　わびやらる
た四の手仁寺ふ奉りたゝ〳〵又和ふも歌
一首の中ふ三つの姿あり一つふい長高く二つふハ
反たゝ〳〵三ふい心深くもゝ〳〵ふ新ちふ
金剛ふのこゝろそやあ反ゝ葛城や
高砂乃山めゝ松の古〳〵　三
九芝ふゝ心得ゝ　ゝとゝ又化諸ふも山敬なり
ゝゝ又　鈍く　濁なる　弱く　重く

うゝく　ゝゝく　ゝゝく　かたく　ゝゝく
古き　かくのごとく奉りはらゝ〳〵すゝ知
反〳〵仏〳〵　鈍きうるやうゝきゝ勾いふいわ
きゝゝ〳〵反ゝ〳〵又大ゝ前のゝく奉
勾い屏風の繪ゝ思ふ勾を作りて国
たゝゝ繪ふゝ〳〵て反ゝ〳〵死溺なのゝ
〳〵濁るものゝ形りゝ山有ふ佛諸ハ姿を定ふ
て心を後ふゝ〳〵ゝ奉りゝ〳〵く奉勾ゝゝも
附勾ゝゝも国なゝ〳〵て服前のうれゝ〳〵ふ
異しゝゝりてゝゝのハ反ゝ〳〵ふ
ふゝて附るゝ四ゝ文の樫量なり国
の堀紙筆の上ふ尽〳〵〳〵諸集の附合

たゞ天王寺まゐりとよみたれば又和哥の故ゆゑ〳〵歟いつ句三十一字の中にて一字りそもゆき文字あれば一首を横ずるゆゑ八雲抄口伝ゆゑ〳〵

月はわが身はいとゞ〳〵俗書ゆゑ

耳はふれしも本居はつるゆゑ

ゆゑ乃上の五文字はくてもやはらかしうり難

じゆゑ詞つゞけがの一二字ばかりつゞき

身はいとゞ〳〵俗書ゆゑ

なるゆゑ文字多〳〵ゆゑ

て一句ばかりさまふ風ゆゑ又俗語に

もゆゑ詞をとる〳〵ゆゑ句体は毎度奉勅

も附合ふもはつゆゑ、ゆゑ又二条中将雅経卿詠

ふゆゑ〳〵ゆゑ文字の余りてゆゑ文字はくてもゆゑ

ゆゑ乃ゆゑ〳〵ゆゑ文字はくてもゆゑ

月は春のやうに毎の中のゆゑ

なるめてもゆゑ

ゆゑ乃ゆゑ〳〵俗語の中のゆゑ

はじゆゑ〳〵ゆゑ文源三位頼政の句に

月のゆゑ月のゆゑ

後鳥羽院御歌の詞乃ゆゑ

ゆゑ乃ゆゑ〳〵ゆゑ月ゆゑ

ゆゑ〳〵ゆゑ風の〳〵ゆゑ

ゆゑ〳〵ゆゑ俗語ゆゑ

## 発句は唱へ方歌は節

発句は和歌の上の初の五文字なり。
万葉集にあり。されども後世連歌に附合
の物なれば、初の五文字なり。
格又発句同一。又発句は
云り。行歌は、一句の上
の癖なり。
まことの御后御
濱津の濱
中の句は、言すれども
て行ぶと言を引て言ふ合語は四言八

言は俳諧歌。淡路の
引まとむ。
紀中の春三の裏
橋ア
と歌
古事

## 和歌の切字の変

哉 有 法印の云く歌は必切字一所一言なる
乃至二所三所切字は悪し。歌は必
多なる切字いとはかりし歌の續きなる
何れの句にも切字なり。又一首の中一所も切
字一續きなる歌は悪し。一所は是非
年のうちに春は来ぬ一とせを
去年とやいはん今年とやいはん

袖ひちて結びし水の氷ゐぬ
春立てふ乃風やとくらん
秋きぬと目にはさやかに見えねども
つぎのわたりに風ぞ聞ける
うぢ人も目をとどめぬ
ちりぬるは花は雖ふかれぬ
志加の海人の藻刈り塩やき
稀なる海人の小ぐしげるも見なくに
刈りてのづから
吉野山うすくれなる花ぞ
異山はなれやうやきわらん
梦ゆめ人のゆえつらん
梦ゆめ人のゆえつらん

かりそめの志でふ濡のうらにぞ
きいつくれとおもふ
天くもめくし多丈乃芽もるに
限りも知らぬ御代の末を
浅ゝぬめくふ恵りぬ後の世乃
百ゝも日 吉乃てゝすだくとゝ
はゝ人ゝ身い、多ゝふ寝ぞ
き多ゝ仏ぬ雛の言ことなる事れ
数かゝぬ身いるぶだるおもほす
いつゝてゝるがめ ちはゝし
うちたゝ世い天なゝ。吹ゝ
校をわゝ さぬ青柳乃糸

教へつゝみ身にうき物思ひそへつ
雁なきわたるこゑ世にもうらゝ
玉の言のうちはのゝうつろふ秋に
かくしも我身をなげきへぬるかな
空蟬の世は常なりと知るものを
秋こゞ定めなき世にうきをうきとて
常なるゝみ世にうきをうきとて
その数にあるつゝ世にあはぬ
我恋を人きゝぬやゆゑぬの
枕のみこそ知るらめ
秋ちる木の下風はいとゞ
寂かに知るらめ言とうり
有明の月をうつす宿の袖乃うへ
人多のぬれかりな　宵の稲妻
明の時く
いかにもつゆ流くもで見ハ
つゝそ流くもで見ハ
秋ちゝ流くもで見ハ
人ちりも心の限りなのゝ
月ハ誰ゝもつゝ
鄙城乃夜の嵐の岩大し
たゝゝうゝ
百受の大宮人ハ
ゝ

ふるゆめ〳〵寝ぬ夜の袂まで　もとらぬ
ひとりや武蔵の　衣うはぎ〳〵し
志賀の浦や遠ざかりゆく波まより
氷りて山ぶかく有あけの月
かくのごとく仏の句とも云葉の續きぶて
句なかり和歌ふいづれの句とも定めがたし
句字に形〳〵二二則〳〵切りある歌なり
詠めもてあぬ外ふるほゝの宿もがな
ゆふも山ぶかき月やまもるらん
思ひぞやせぬ　君がうとくなる
かくのごとく二二則〳〵切多歌もあれども

〳〵形に二二則〳〵切なら〳〵とさて
切れ字の変

切れ字は格句とて一句の格を極る意形り
依て歌にも必切れ字なきは歌なり
〳〵形に二二則〳〵切字なきは歌なり
此二則乃詠絶する物なり絶するとは云葉の
終る義なり異しらる二則とまでと限ることなり
物ふ必節わり尾なり詠入句を意とする
〳〵り物い年ふてハ納らぬなり〳〵耳迫ふ云ば
詠重の心なや位の江等ものり〳〵と詠た
さすりもなや位の江〳〵ハ年形り

等しくて大やう異したるべきなれども作り又
りくだりてこれ切字一首の額なれども
初心の輩も入門べかれば今少し一首の上中下前
くの切字ばかりにて字こゝずば上中下ともに色いふ
どや答てこれかの色くの子細ばかり大ふし
等しきもの多きなり 詠ずる
異しきや我教嶋の名ばかりで
浦世のかゝるとこれは名所
主意は歌の名所とこれ色どかるこの浦世のかと
名所ばかりやたもしいとあること
義ばかりこれ歌ばかりふこしくだりて
自問自答の心ばかりにて切字もばかりいかるる

所は切字ばかりなれども主切字の所ばかりの所までが同じ
なれども所ばかりの所に答へ問ひたる答へ
ばかりの詠は絶えたる答へ又切字の一首
隠れなき歌もばかりなれば大ばかりこれ詠ずに
秋とばかりの人なれば色なれば
主因の杜の
ばかりの下 年
色は意なるこゝろ
又連俗こゝろ百句五十句ともつゝまる
は前句の人逆一前句の答へるこゝろ
切字ばかり答へ一句
は詠絶たこれは手ンこゝろて答へ
されは切字に入て一句の詠に絶たる有る

箭尾識して一句とする六字形て切字なり
て句を二つにするハ相對さるゝ心を知る
仏〻是も往昔次〻いとゝ一時分ハ切字又
季のゆゑ〻〻ゝ哉ハ哉ハ哉ハ哉ハ哉ハ哉ハ哉ハ哉ハ哉ハ
相式ニ是を法定りて必切字なれ又ハ
四時乃中を時節の詞なも人倫ゝ形り
なりなる仏切字といと物い大事奥言十八
章なりゝ定められ形ゝ形ゝ五の切字
八十八則父母ゝ師ゝ分れ出る
なり是一句くの中ふりて切字ハ動ける
なる〻〻石碑の筆ハ一句ふ切字のなるを一句
の中乃の文字ゝ中ゝ五〻又ハ仏の字なり仏

ゝ人ゝ中ゝ五ゝ尾きゝ中ゝ五ゝ尾も形りやとゝ
ゝ心ひてゝを意りゝ尾ゝ形ハ能ゝ師伝ゝ
百日ハゝ形り又彼十八の切字ゝゝハ

切字　もゝ尾
五形字　一句尾形

や　し　ど　ぬ
ず　よ　せ　れ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

切字ゝ十八の切字ゝゝハ云り又云く切字ゝゝの
心得ゝり然ハ天地の句ゝりて医陽ゝ分ゝ
発ゝ仏連俳ゝゝも一句ゝ立ゝて歌一首の詞書
ゝ仏ゝ也ゝ有ゝ切字ゝて天地ゝ分ゝ形ゝ万物悉
く法陽伝ゝ理ゝ和伝ゝ又口伝ゝ云く世ゝ
切字ゝゝ人ゝ中ゝ五ゝ中ゝ肝ゝ詞ゝ六ゝ形り何

有る切字を忘れたるごとを云ふ是を切續きし
ごとく八六の切字有るを云ひ其り多き所
凡常の八ヶ所も句切りなれば其に歌風へず
して八七五と羽の数と合ふる物有
例今ば梅咲くとなれば四言なる有るべし
〜や〜ら〜て〜ら八ヶ所梅咲くやとも梅咲
てとも云へば初て句の句切字此
ほ有るこうとは勝れる訳なれば句切字と
云へる知るべし
梅咲てて〜かり〜何と〜て何〜
梅咲や何〜〜〜て何〜
と忘れ集る変まる所なれば右ごとく

句切りてべく〜は忘れ知るべし必十五番の切字
十八の切字ちぐさの枝ちる歌の極り多き物なれば
何所なりとも句の切れて忘れ難き所を勝手所の切字と廣く心得
べし又切字とは今日の人の初めはじめ〜句切
の所ふれる有ふ俗に切字と云ひ伝へ多と知るべし
もとの起りは句切字とは〜〜〜形り又
云くまく〜切字なく〜て発句を仕る者伝へ
て知るべし又初心は開ても必切字を重〜忘れ
寒かり又古人の発句を自然ふ於ては名人の
きこもあり〜

切字なくて句を仕る者ふなその変

[illegible]

[illegible]

[illegible]

治定の新決新の意なく矣乃字形を意路
ゑれ思ひつか弥めゝれの類すり又淡ゝ形ハ字
心軽うして或の字ゝ形り色ハ意ゝ異ゝ形神
ひがちゝの類すり先ゝ形ハ龍ふも屈すす初の
立文字ゝも中ゝもゝ形り又字ゝ留り心淡ゝ
ゑゝ仙口伝ゝ或ゝ先感心の或ゝゝゝハ字ハ
も金沢集ハ三河

神無月時雨の雲乃ふるゝ子
いろ〳〵みたる鈴鹿山哉

堀川百首忠房

引淡ゝ雲の山乃青はゝら
春いくれとも猶寒ゝ冬

又連方の発句ハ

山高ゝ誰もゝゝ橋ゝ哉　紹巴
姫ハ路慕徳卿の和歌の傳ゝく花咲く世ゝ
浮世ゝゝるゝゝ月ゝ花ゝゝ同じ心
名月を云ゝ多ゝ世ゝ形ゝ感ゝ
心のゝ形り右の句も写ゝ或ゝゝ意
形り又ゝを歌のゝゝ形ゝ俳諧の発句ハ

木毛の眠り落ゝ柳ゝ哉　琴風
ゝゝゝゝ蕨ゝハす　柳ゝ　湖春
猫の子乃組ゝゝ　其角

かくのごとくの類しいたれば長谷風情を深めて写呼併び写俗少時の移り感じ久
ゆかりの色すいたれば色西方浄明の心を
うばいて金念仏明の光落暮寂寞の力
依て長谷暮のかなしきも云り又はかなしき
流しのかなしきもこれり吹流しのかなしきと
同多のかなしみ心の弾ぬ光なりり又和歌
にても

梅咲く遠山鳥の声ふり雨の
ながめ日もすがら　色うつも
色吹流しのかなしの方の角ふ少時
の句口傳なり

中の哉乃ふたたの変

中のかとこそ小連方小

歳　花咲くや四方石の竹　宗祇

織こそ色なる色なれ水の竹の水

かくのごとくふ中文字の変明ハ小海ともこ
形中のかこそり作連方ふたい色なれ水
のかやめそりはこ中七文字の中ふ竹なり小蓮方
形こそこそりこれこそ俳ふい苦しこそ作
そどめの句後の句こそもみ口傳なり又俳諧乃

叡山の中乃ぶし

なのてらの花ちるかゝる稲の秋　古芳

是中のぶしより作り出る口傳あり又一代の中のぶしあり

歌ぐるしふくまし人ふ　社頭　智月

是も中のぶしにて文字八ツ一所ゆ出る

白作り別作りにて口傳あり又六ふ裏細

歌の口傳ふ云く

ゆすれてハおちぬべけるくゝ

我のみ知りまくゝ月日也

ばかり柳ふもらすしぼくくてゆ安くさら

ひ作り是まのぶしたるゆ是まのぶしにて

ゆとゝ又和ふてハくのとくゝ等三ツめ作る

ぶしたる中のぶしゆとゝり作りゝ河のうゆ

口傳あり又新續古今集ゆ後福光院摂政

我ぬれぬ我為原の郭ゝ

ゆとゝ多ぬとゝ　玉津島姫

ゆとゝ

浦世　月出てゝ夜半雨　紹巴

是ゆとゝ中のぶしゆとゝ

ゆとゝ切りゝ初ル一ツめ二ツめ

五文字ふ浦世ゝ

附合ゝ中のぶし同じ心得ゝ

附合

乃ち

矢ふすま　虎溪の橋の短夜を

[illegible]　但し此俗の句上ぶ

[illegible]　口傳あり

歸路或の変　或は軽重の二つある変

又歸路或は三種あり和哥ふる後撰遺集

君が為わたりしさ[illegible]

[illegible]　思ひ[illegible]

古今集よりの人丸

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

高山寺　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

東路の不破の関屋の板庇

[illegible]　思ひ[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　口傳あり

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

淺の川紙の用なる事
色ちがいなる事の帰ゆかずより口傳あり又
俗諺そもそも心の帰ゆかざると
の二つあり
陽稲の我扇ふるつる紙衣なれ　高弘
秋風人を吹葉の変ぬるか、
色等しい心の帰ゆかずより口傳あり又
杜若沼に繪書の有るなれ　鈎雪
色いろ葉の帰ゆかずより口傳あり又
小鞋重の二つあり　候今

一ちぶ一変つる蔵うか　高弘
色い吹き流しのかすてさしてかも心か
ゆかい軽きかすより又帰ゆかい心あるか
ゆかい重きかすより知るべし

願ひがちの変　ぐれ　もぐれ

基綱卿和歌の口傳ぶし
ひらぐ　とこ空　きたるの青ミより
むらの〜〜　暴れ行雨もなれ
古今集よりあるべく
歌　峠のやまとのみち衣
こゝろとゞまず　逢ふ　もぐか

すべてものうけるあぐしぬ願ハーき仲お
ほいこのく願ひがなるなりとこそ花ひが
ちゝとこそふいさーて行ゆくさとも けうすけなりても
見しりうあるあるあたをあふあるでなり仏
もがかとこそもけり又ハ何ぶ形とものあれた
入れぬ夫あり 撥ぐてかたをぶりてゆ形こ
ぶぐうろいふあ形ひぐあなり 仏ーあひぶか
諭ふぐうりふハ限ぬへうすこ十ふの味ひづれ
ふ夫ちるへーー古今集より人さうす
ーーこぬ滝ちのくもがかさうー花
ぶ祈ても すくんあんあ人のあぬ
續々載集より為世

おかーくハ空ふ春の屏もがぬ
こそ恋の房ちたちーーそめん
仏ーー諭ふもがぬくあぶーこまるもがか
ちこぬくふこ口傳けりう又建今のもがかのうハ
梅の花 香ふぐうーはすあもがか 紹巴
あてさハうすがぶこのたもがぬ、
今ハけり 秋のりぬもがか
今も蓋りての舎りふ
花もがぬけうーー白ひのけやぬ外 宗祇
和今の浦の春風もがか宿の松 宗祇
かくのとくふけりぬうももがぬくあぬ仏

〇二句ともに口傳あり又他流のもげれの句は

冬篭巨燭へとゝ人客もげれ　乗行

寒く浮くゝすゝ間寒しや梅もげか　慶家

金ハ色ふ淮じと知るゝ〜又

子のりふ那人行くゝなもげれ　玄弘

仕〜〇句のもげれ同ハ一代ふ〜〜口傳あり件〜

もげれハ万葉集ハ欲得とも欲成とも書

行るとゝ又玄連宗ハもげれとゝる前句ふ

附るふハ撰てなゝでハ附るゝ〜ゝゝり件〜俳

てハ〇格の定り形〜〜いまふも附作るゝ〜

俳の発句ふ

鯉　登ゆ　仙術もげか　花の滝

〇鯛の句ふ

鶴ハ　素ふ　ゝゝ　ハ　松ハ枝

色ふゝゝ知ゝ件〜花の滝の句口傳ゝ

又もげれゝゝる事ふ東口傳あり

又只げかゝる也形ばげかゝり為家卿

高砂の浦ふゝゝ松ハ鯛ハ形〜

沖ふゝて　ゝ　ゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　

又芝も顔てらりのいわるぎ行れの一朋りても
ひろ〳〵亭集俳諧分ふらう人さて寺
耳無〳〵の山のくちはら〳〵えてしがか
四しの色ハ　下浮〳〵　下すま
月ぐく俳諧分ふ蕉原の奥風
春雨多形引ゆ人の名菜ゆも
ちりそてしがか人もつしやと
芝ゆて知る程俳諧の発句芝心浮門〳〵月
俳〳〵分ふて発句ンとても觀ふ寺一句の中
ふちるが形とるふ月ハ口傳ハり
ねく品考歎〳〵の或の変　俳句〳〵或と留多る変

和歌芝四子ねく〳〵歎〳〵の或ハり
俳句
風なしの多ゝ岩打波のたのれ乃ら
くるけ〳〵もものたたもとたる形
新ハ帖ふ元俳
須磨月石浦の夜波〳〵頃ふ松
ひゆゝく〳〵ゆ　ゆ月ふ
鶴〳〵感じ〳〵ひろ〳〵
芝の落俳芝ひ物喰ふ彌ふ
蕓蔚ふ今日ハ責ふ名菜ふ句　五月
吹ふちりつ山ちり蟹菜の高ゆ　傘下

又一体

花ふ咲れて夢ふ見んかな　或人

秋しらす琴柱たつれて寝ぬ夜かな　荷兮

色も香もなくて黒ぬ木の歯かな　杜国

仰かしこ口傳ひとり又大坂にて或人の許ふ

旅窓の長夜　芭蕉

九の夜起て月の七つか、

うれしさの歯ぐきに梅の一つ哉　杜国

屋二つの月を枕　二つうち　文鳳

色等もこそなくて仏ふ有くとも歯ぐきのうちか

ひとり寝ぬ時ど味して和ふ〳〵又七つか一つか

二つか〳〵ふ体ふ分ひとりかすを留ふ作例なも

知ら〳〵仏〳〵体ふ分の月文字口傳ひとり

難しの或人の文

連歌の発句ふ

咲く花のうつるぶ波の玉藻かな　宗砌

時雨〳〵ふ月い桂の木陰うな　親當

咲く花い時雨〳〵ふ山の体ふうれ

俳諧ふい

八九月空て雨ふは　柳　うちも　芭蕉

仏〳〵難しの或人乃口傳ひとり

迷き分る或人の文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

盛　宿　老

白　[illegible]　[illegible]

流　枝折　氷　響　柿　[illegible]　[illegible]　教　[illegible]　[illegible]　青　[illegible]

[illegible]　根指　別　[illegible]　名残　恨　[illegible]　汝　四　白　遠　白

青　さがらし
うだつ
さかり
うだつ

寒　寒
遠　いきがらし
ねがらし

山類ひいらぎほどもなく四方の方のみうつくしいつれも咲
ぬ間でもくれ〳〵すぎ右の方のみ或は間ぬ
ぬ冷さうなれいろ〳〵らんと多く續く紅なる
屋〳〵大きなる木のくらんこ宿りしん氷ゆるん
さるらんこ〳〵こんにゃいうきあるかしとなりし
き水仙の下に寒ぬ蕗ぬ冷かなる冬
山さえ人なりの樵夫ぬ樵ぬ者ぐみうは
伍てを水仙五音の多ぬ三　引くすつぬ
ひゆは　又いの仮名うり續きあくいろ冷
ぬ〳〵間〳〵さるうり連今の春ぬ

言ハ言月ニ氷ハ
梅ハ花　柳ハ屋ニ
連今ハ往古ハ代ニ
代一向ニ引ハ冷ハ
一和歌ハ帰ハ中
ニ春ニ冷ハ
もるへ〳〵ニ又ニ冷ハ
ニ千代ハ引ハ冷ハ
屋ニ千又代合の寒ぬ
ぬ自然ニ冷ハ
春の夜ニ

雪ハ雪　梅ハ花　柳ハ屋ニ　桜ハ
くうぬ
連今ハ往古ハ代ニ　花琴ハ
代一向ニ引ハ冷ハ　當時ハ
一和歌ハ帰ハ中ニ
ニ春ニ冷ハ　連俳
もるへ〳〵ニ又ニ冷ハ　切ハ
ニ千代ハ引ハ冷ハ　ニ七ハ上ニ
屋ニ千又代合の寒ぬ　ハ
ぬ自然ニ冷ハ　ハ用ハ
不ハ〳〵ニ冷ハ　俳諧ハ
春の夜ニ　ハ　ハ　ハ

先ちこの法ばの発句にて第一の法ばの
留方と第二の句の法ばの留方とは別作
なりとも口傳なり

沈み或の変

こづみ或とは法ばなりも程くらかつ
くて移ハ句ハ作り人も行くすべき長い難しい
くて治定しある意もおりは難しゆゑ治定
なるも句作りなりて苦くくなれども多
分なりくくなり能今ハ
定りけは変ハ句ハしの句はが分
名月を旅立人ハ須磨人ゆゑ

蛙の六くく人むすぶ花ゆゑ

かくの六くの類しなくくなり沈みなくなり
総じて俳句なる句ハ一句の句は果ば大きな
下ばとなくなるなれば法みなる作り変
ハ句果残りて風人作り句ハ引行なり
なくくなる風変なるなり句ハ行なり
更くくの心なり月くくなるなる前の法ば
ハ山なくくなるの移句ハ世ぐみな
なる句なくくなり沈みなるなるなる
なくなり是ハ法月沈みなの二つは分つなくく
又月ハ法月なるなるなるなるなるなる
句なくくなるハ沈むばなり句ハ沈みば

乃至[illegible]の[illegible]口伝わり又
世に出[illegible]れたる[illegible]方々頼[illegible]
[illegible]人もわり[illegible]誤りなる[illegible]程[illegible]
の[illegible]所[illegible]文[illegible]作[illegible]高[illegible]
緒[illegible]琴の[illegible]の[illegible]の[illegible]の引[illegible]
[illegible]著[illegible]初一[illegible]
[illegible]沈[illegible]大[illegible]誤[illegible]
一つ[illegible]沈[illegible]
[illegible]一つ[illegible]
[illegible]沈[illegible]
[illegible]程[illegible]

現在[illegible]の変

現在[illegible]文字中七文字[illegible]
[illegible]沈[illegible]
[illegible]切[illegible]
[illegible]現在[illegible]
[illegible]
[illegible]

面白[illegible]花[illegible]の本[illegible]
[illegible]筆[illegible]
秋の空[illegible]青[illegible]瑠璃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

第二の句言霊〜いかにくさくさしても重き言
葉〜言霊ことばとてらすまが
て〜もとへのうぢはりあるこ〜
第三の句いかに青ちどろ〜ばらちどろ
又言霊〜ことばいかにいかるとき
仮名はりされども一句の味はひ
心の深さよりれば無味乾燥
山集る

言霊〜ことばの葉風一駄から
ぶるを引て現在ぶるを山〜ぶり大なる謡りなる
言〜を一句の明はしを知〜る人は現在
ぶりとも言へ〜ぶるを上ふ現在の〜文句わ
ぶりとも謂ふ〜も苦〜ふ作ぶ口伝ぶり

又言ことばの別伝ふ〜ふ〜ふ命〜一句りてもが
ぶ謂て苦〜ふ〜ふなる句伝りあり連句ふ
ぶりふ〜ぶ〜ぶるもあるこ文句
連〜ぶ〜ぶるこ七文句羽連〜てゆく
受伝あるふぶ〜ぶ謂ぶりう〜の現在の〜文
句ゆうりぶ〜ぶ〜ぶ羽を鎖伝あるう伝ふ
松〜ぶ〜ぶれぶ言も隣伝ぶ
言重〜ぶ〜ぶうり屋〜伝方持ち
友山は松葉と同じ〜ぶ山ぶ
ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶは右三句の〜ぶと同じ〜ぶ
謂ふ伝ふ〜ぶも苦〜ぶう〜ぶ初の句の〜ぶ文句
言〜ぶ受〜ぶ〜ぶ〜ぶ

二のハ月ハ言葉〳〵はだりと愛多く形り長い
文字ふゆゝりはさすれ文字多有ふ苦〳〵うねな
りり多三のハ月ハ長も用ゞ〳〵の長く下
の羽へうけて用ゞ〳〵ゆ山とほぐけ多れい向ふ〳〵
乃働きらくはりて苦〳〵うねすり又一句の
中ふゝ文形すれば向ふ〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵續日ていく
ゆ〳〵うゝ羽形多〳〵能今ハ和り和さゞ
ゆ〳〵ゆく空ゆゞ〳〵うハ向ふ〳〵形り〳〵ゆうねさし
有る羽ふかり〳〵〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵苦〳〵うゝ〳〵ふ又
ハ海〳〵城〳〵等の〳〵も向ふ〳〵の多くしふ用ゆ
れハ〳〵日すれも長等も海〳〵日池ふ城
〳〵異ふ〳〵〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵苦〳〵うゝ〳〵長

等ふ形の羽ゆゝり形〳〵ほぐけ付多ふ向ふ〳〵の
雑〳〵ふゝ〳〵る左ふ〳〵又ハ文字ゆ〳〵文字ゆ〳〵る自
ふゝ〳〵も苦〳〵うゝ〳〵能今ハ用ゞ〳〵ゆ
花ゞ〳〵ゆゞ〳〵用ゞ〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵の多
ぐゝ形り〳〵〳〵ゞ〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

花ちる時なりけるかや　梅　将　宗砌
俗語又は切字なきゆへ作者とやとるべき
みなもと口傳なり

霊梅うるはしの変

梅　柳　さくら　名殘　月　雪　　玄仍

作者は口傳なり

中の心の変　花　ふるさとの花は
がふるりてうるわり

ぶたりのことをしるべし　又字は略すべし
たゞ中のことをしるべし　和歌は新撰集ふらん人知
らぬ　くも降くらぶる三輪が崎

作者はうるはしの変もなくなり

文武集の坂上郎女

小夜更てさびしくなる山の
月上の宮乃　もちどの　声

高集ふうつね

別所のしうれくも　なるの今夜
なしこゝろなる　何を忘れし

日集ふ五こと

名ふ人ゆくるあく　坂を
人多のやうなる名ふ　とたりなれ

日集ふふ人ふ

いとやもなきなる　月の露の

もゝ[illegible]も紅葉[illegible]くる

題集[illegible]人[illegible]

空障乃世[illegible]も[illegible]る[illegible]

咲くに[illegible]

題集[illegible]

[illegible]

題集[illegible]

[illegible]も月の[illegible]

山の陰[illegible]

題集[illegible]人[illegible]

[illegible]も寝[illegible]

心[illegible]

[illegible]

[illegible]

又同[illegible]

[illegible]

玉[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又俗[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

アラジの心ゆかしく又古今集甲斐分ゆ
甲斐が根をさやかにみしかど
ふかくこそ思へ さやの山
色ばかりとる紅葉はしばかの文字を勝て多時
作り山切字餐ゆゑ
上ふ切字を重て州を面多句
夕ばえや秋いろ色くの雛ゝか 玉井
寄雲しるる餐一歩だ
作るく様しが菊の白きなる 巴丈
何の木の花とも云ずず白しかか 玉井
七夕もいさぎよし一葉二葉かな

先等のうゝ口傳巧り
上ふ切字を州を面多句
坐頭ゝと人ふるれて月ぞ 玉井
病房の夜寒を張寝ゝ
しやくとる先人て昼寝だ
作る先等のうゝ口傳巧り
上ふ切字を州を面多句
節季ゝの雪ゝ風雅も師走ゝ 玉井
又一作
本のもとゝ汁も鱠を掛うれ

又一体

鬼灯の実も葉もうつも紅葉ぶ、

又一体

もろ〻人の名〻花も百神ぶ、

老等の句〻口伝有り

又一種

ふみやこそ[illegible]て[illegible]留る句

新宮 花ちらす御池ぶ

月やうつる似る時の今宵ぶ

秋や将外の花咲る時の多池ぶ

老木の句〻ふみやこそ[illegible]多れともたゝ留る

かゆ〻も苦〻しきまに合のやとゝもの形山や

い切句のいろ〻ぶ〻〻知る人〻今世の中は俳人この

やを用ひて切句をうる者有り老習の迷ぶ

うるかやを文句を切句とは[illegible]多るまの形ふ山ぶてう

ふ事句ハ切ハ別にもかゝるも留ハ六ハ有り狂

口合のやハ別琴ふ記し付

ふみこそ有て栽る留る句の夏

袖ふこと解か花折屈方うか　宗祇

名こそ秋　そハ冬の月夜ぶ

作〻老木の句の留ハ口伝有り

発句の載留ハ[illegible]留ハ通以多句の夏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅遠く香ぞ[illegible]り水の流れも
[illegible]く根ぱ[illegible]ば[illegible]
[illegible]

[illegible]筋[illegible]
[illegible]色黒[illegible]日数ず、
[illegible]日数
[illegible]流れて[illegible]
[illegible]日数[illegible]流れて

[illegible]も治[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又がもとこの人麿の帝より以前の人なれば
たとへもいとゝ依てがもとこもりがもの羽
ゆゑ也も長もの羽なるかゝ千とまる千
又之歌ふもがそこゝろをしてをしびの心わろ
古今集の甲斐の国の歌
甲斐ぐ根なさかやまもとしがをらはく
ちつ月りゝ夜の中山
古今集よりこの人なる千
心がへとるものかもがかと　兼盛
くるゝ日もものゝ人を知るこゝ
伊勢の国なる千の前の中のこゝふくらゝ又
思ふどの春の山べ分たりもれて

たゝもとゝ旅寝してしが
有明の月もの月石のうゝ風
波ゝうゝこゝとゝしが
うゝこゝる歌の類しいうゝ形こ心形
さやもゝこゝがこゝいこゝがれかりさるものふ
もがこゝいこゝるものもがかり旅寝してしがと
こゝいこゝがこゝうこゝこゝこゝいこゝ
がこゝうこゝ行こゝ但こゝ留りふい
がこゝ留りこゝいこゝこゝ千れいこゝ留りこゝ又
ふ抱こゝ字こゝこゝいこゝ回りこゝ口傳所

や文字の字明秋くゝ行る変

もゝやまの秋ゝとゝぬ古釜に　玄代
南無や空只有明の社宇　元順

又一代
夏草や兵どもが夢の跡　玄代
涼さやは蔦なさえ住捨て　曽良

又一代
ゝゝゝや鍬の円り初嵐　旦藁

又一代
もくゝ行や馬ふ氷ゆ図面　玄代

又一代
元朝や行ゝゝゝ遥　楊路直

又一代
名月やゝゝゝとの壁き　明及

又一代
名月や鍬の声と犬の声　二水

又一代
白菊や素白で尺ゝを秋の霜　北水

又一代
ゝゝゝゝ名やゝ仏吹く萩葉　玄代

又一代
取りくれて又やゝゝの耳の芋　尚白

本曽の情ゝや生ひぬく夷の爭　玄代

又一代
ゝゝゝゝ露や社丹の花門　蜜　玄代

時雨降や五尺のうやわ竹　〃

又一代

簾して涼しやうの古い口　若芳

書かしと家うやくれて甘帝花　〃

又一代

月まつ帰るや古寺　砧哉　玉弘

又一代

秋待氣特やりふ五里六里　〃

又一代

寝道具の月しやうま　魂祭　玉弘

又一代

さらしなの隠れぬまのや流田の橋　玉弘

就もつも同じ人や桃の酒　傘下

馬うて行くしくれ　乙刀

見ふく家も面白や　秋の月　耶水

又一代

旅なれぬ刀うなてや村しくれ　常秀

又一代

砧すて我ふ関はらや坊々寺　玉弘

又一代

森の蝉　市中　声や坊つ多声　乙刀

又一代

まごくとつむやはぐや玄筆　其角

又一代

月や遠う春や遠う年の云　西武

かくのごとくふや文字の並列仮名ばかりなる

ばかく名目遠しは仮名ばかりや文字の並列なる

仮名文字意も一概すべし然れども能はしば

記すや文字の偏旁なる能はしば

題のやの乃爻　名目のやの乃爻

まづ五文字のふ高くや文字を学ぶべしのやと

も称美のやともに感心のやともに

治定のやともに云り上五文字ふ学ぶや花咲や

月雪や名月や又一代川岸や山陰や磯

山や山おろや浅茅生やなど上五文字ふ並

も同じ仕様なり又先生仮名やともに十七文字の

終りふのこつくんや文字をなりて仮名やとこそ

つくすべし名目ふつくんや文字をなりて呼ぶべし

のやとこそつくすべし仮名ふ仮名

題のやとこそなり学ぶや花咲や白雪や名

月やうこそこそ題のやとこそ仮名ふ名

なり感歎なり写学なり感心感

ふ必なり治定なふ感ずる心なり答

や写学花咲や云こそ意必なり

水取りやふ先りの仮乃常の言　文政

茶の実や花　形式鶯の世移過

山吹や字治の宿　仮の自人とき

金山毛の濱〜て知らへ〜又一作
帰〜ちやまぐふ山松の枝乃風　玄弘
ちるかやうも花とうく琴の音　〃
波枕や一口の夢の猿の面　〃
仏〜山の口傳ひより又一作
月ちや梅の香ゆくゆく小山代　〃
年〜や桜花こやす花の色　〃
落ちるや高久の宮乃社鶴　〃
色たも呼ぶ山〜の松のやも稚琴のやも褒
琴のやも沼宮のやも感心のやも
仏〜題のやふ山ちうぞ又一作ちり
夕ちやや桜ふまぐも波の花　玄弘

又一作
うなぶ〜や爭ふ形る人の影　玄弘
仏〜色ちのうこ口傳ひより又桜やみ〜刑上
向ふる神格ちり連歌
神ふ影や本綿元ちる扇ぶ　宗長
河風や五月秋流す榊　宗祇
色ちいふ桜やちり仏〜口傳ひ
又〜名一刑ふはくやも桜やこ〜り連ちす
橋立やこ〜多〜たる波ちる霧の波
色ふて形ち〜〜連歌雅宗雅名一刑乃
やふ切ちうちる山ぶこ〜り又連歌提雅ふ山
旧統可力〜〜ち名一刑のやも切字ちりこ〜〜

花合

春日野やむべも名ごの萩が花　紹巴

仙〻伝新古今の歌を連じてや名所乃やを切字ふるる事人人も
切りされども俳諧ハ切字を嫌ハ切字を用ひて名所乃やハ切字とも俳諧ハ
みな〻〻新〻なり

象ぐるしや雨降が合歓の花　大江丸

ちさもつや月夕の旅乃明方　〃

難波津や田螺の蓋の冬ごもり　〃

仙〻是ハ名所乃やハ切字ハ俳諧

又一体

山中や菊ハ折ども湯の白し　大江丸

是ハ山中の温泉ゆえ菊ハ

一体

湖や　暑さ忘れもきの顔　〃

又一体

さで波や風の薫りの相柏子　〃

是ハ波や風の薫りのやハ切字ハ俳諧

白の終りふや高麦　一名於やま

仙〻御やはこれも秋くれて冬ハ月ど

ふるとハ

一里ハ雪の花　辛の子孫〃や　大江丸

色い糸山 折るや 折し
名栗一て御月の京 めぐいだや 、
露ちく〳〵 試みき世すもぐだや 、
竜り居て木の実 実捨いだや 、
色笠すいこれ頭し 拾るや 折り
山吹の露 茅屋 花乃ちも 点すりかや 、
色ひ点 やしとそは 拾多すりて

切株や の変

切株や 色を 中道の やいもり
物 祭ふ 道や けるる 今日 春 昌叱
色を切りやとそふ 道行るとそりかた やと

切り多 ありより 仏〳〵 仏ふも 以 拾りて〳〵

疑しのや 乃変 長 下 ずや

修験人の小袖も 今や 古用 二 文弘
秋を 待て 紅葉 ちるや 菊の露 、
蓮の香ふ 月を ちるふすや 面の 皋 、
宮日ハ 神を 友ちや 手ふ 、
舞次ふ 鳳 や 波の下 むすび 、
旅寝〳〵 そ〳〵 や 海の 様 拂 、
木ふ自しや つ手 帰りむ 、
切天もまつや 流の 少 言 、
色ちふ 拾 難しのや しすり 又 、

松 松たち 巻てや 風の葉る 高 大系
月々巻たほ〜〜〜〜 稱てやもの 神 〃
色も新しのやすり 作〜〜 てや 〃〃〃〃
葉口傳 又でやの 〃〃〃 新しの
やすり 作〜〜 ずい 〃〃〃 口傳 〃〃
一作 〃

ひさもらくもらうでや高の枯屋花 大系
作〜〜式句ずい 〃〃〃 〃〃 〃〃 口傳
又一作 〃

立てんん 巻やうける大 ぐミ 世小
色も新しのやすり 作〜〜式句口傳 〃
稱美のやすり乃一作

大系
大の松花や 殿 稱美
〃〃〃〃 社の花の 窓 〃
月〃〃〃 時〃〃 夏五月富士 〃〃
菊の花 咲くや 石屋の 石乃間 〃〃
月花の色〃 〃〃〃 〃〃〃 〃〃
色〃〃〃 知〃〃 〃〃〃 〃〃〃
〃〃〃 〃〃〃 〃〃〃 又一作 〃
作〜〜式句口傳 〃〃 〃
時〃〃〃〃 〃〃 〃〃 〃〃 〃
風流〃〃〃 〃〃 〃〃 〃〃 〃
川月〃〃〃 〃〃 〃〃 〃〃 〃
色〃〃〃 稱美 〃〃 〃〃 〃

治定(ヂテウ)のや乃意

雀の毛乃黒きし衣やなのそし　大弐

須磨の海人の海人の矢さきや就て　〃

海人の袖　[illegible]　[illegible]の先　〃

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　治定のやも

一名り感(ニ)心のや[illegible]雀の毛乃黒きし衣や

[illegible]　[illegible]　[illegible]感心のや

[illegible]　[illegible]　[illegible]

や文字の別作の〃

作[illegible]も四切の別作なり

定頼ゆ百寂の蹉(ヂ)やあらむ　大弐

百の身を枕とすらや多の解　〃

作〃口伝なり

又や文字の別作の〃

作[illegible]も四切の別作なり

多の戸を和[illegible]や夢穂ゆ[illegible]　大弐

作〃口傳なり

や文字を手枕多の〃

[illegible]くとつもや[illegible]や　玄蕃　其角

月や遠う耳や近う年の苔　西武

芝草はやれたる伸びて石蕾しるき夕暮て
和合ふも春寿は友則
夜やうるるるやうやうもろこしぶるく
我宿たちしもやうやうに彩る
春寿 康秀
春やうるるるなやうに遠きに開まし
雲多くも咲もてはやる
山ずもやうれるやうれる石蕾しるきるてふるる
夏歌しのやの穂ありり遠しにてふるるはるる手
や文分の妻しにてふるるの夏
芝はるるる

多雜なる人の交なれや 仕屋泊り
亡 巻のうぶぎハ三ヶ月なれや 菊のごとく 、 きく用
首出して、初雪ぞや 山 袋 竹戸

又連句

世の中ぞ雪ぞや 関ぞ 雪ぞ
色ハ白ねく 紅色なる 雪ぞ 降り 仕 俳諧 八海
格ちなく 又一 仕 ぞり

山 烟 物 ぞ 薫 引 松芳
色ハ紅色なる 雪ぞ 降 手 異 雪 多 文
字なるへし

とやの夏 一名 巻 ぞ 三ヶ

とやの夏 一名 巻 ぞ 三ヶ

星 清 の 関 ぞ 雪 ぞ 嘆 雪 ぞ 十六 弘
作 別 琴 ぞ ふ し く 記 ぞ 舟

とやの三 切字の夏

砧 ぞ く 戒 ふ 関 ぞ 雪 ぞ 雪 の 事 、
作 く 月 ぞ の て ぞ 口 作 作 山 ぞ 祖 多 の 習 し
三 ぞ ハ ぞ 雪 ぞ 口 作

とやの 切字の夏

連歌

花 月 世 ハ 春 ぞ 雪 ぞ 朝 朗 家 祖

俤詞ふ

春ゝ[illegible]や名も[illegible]き山の朔[illegible]　[illegible]

口伝ふ[illegible]くなかれ[illegible]や[illegible]

あぐしの[illegible]文字[illegible]

[illegible]も[illegible]ふ[illegible]

[illegible]や[illegible]

しかの[illegible]口伝[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]

[illegible]

[illegible]

南無や空只、有明の歌　元順

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の秋ちる事行り又然へ咎めてやふ帰ゆも所手
ふなれまハる変万ゆ連歌ハ

年まやくるハ　彭　蓮　楊　宗祇
さくれまや名りを残す秋の海　宗長
月花ハまてハ知りまや　彭　紹巴
今ふも新古今集ま西行
年ふけて又新もべしとたもひまや
命かりそ名ちくさくの中山

俳諧ふ

しぐれまや無じ物多　勢舟　夕非
行別春ふ所しく記す

めやの夏

めやのうちぶ　やハのうちふ
ア月ハのころふ　ふくしく記す

やぶり立てやふ可しる加号の夏

連歌ふ

ハぶれても花や朝露　八重　楊
色ハ花やハ残まこしのけ多ま
今ふハしやの多くハり寄集ま
秋の田乃ほのうしてま稲妻の
光乃ふも　我やまくく
顔しやくり戒やハまくくまれハ
云志ふ祭り咎めずしてハやハのりくまま

[illegible]

文[illegible]の変　[illegible]

[illegible]

最うつす星の川辺の梅の花　賢盛

秋ふかし露の木の葉の朝霧

花の枝もうれる物の友[illegible]立　智薫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麦の むし尾花　[illegible]

麦飯ふる面の[illegible]猫の恋　〃

[illegible]　〃

花ふ寝なを[illegible]の[illegible]の巣　〃

[illegible]

雛[illegible]時の[illegible]雛[illegible]　[illegible]

又一代　京都[illegible]の[illegible]事[illegible]功多[illegible]

雛れ人の[illegible]者[illegible]寺花の実　[illegible]

[illegible]人[illegible]れ[illegible]ぬく[illegible]田の橋　[illegible]

[illegible]前[illegible]れが重い　秋の露　李由

又一代

灰の夜い雛れ　初秋の堂籠　寄良

[illegible]碁の一[illegible]い行　年の宿　[illegible]

代[illegible]の[illegible]　[illegible]二日の月の吹[illegible]　[illegible]

代[illegible]口代[illegible]又一代

四月歌に曰

松風の音ふけゆくままに　世尊

仏〻口傳あり又一代

二人乃〻〻〻今宵も降るかな　義

仏〻口傳あり又一代

夏の月御簾の内にて高坂の〻

仏〻口傳あり又一代連句

春の夏の月の濡山の下ばと　宗祇

年毎の空のけしきもかはらぬ

かくのごとくふる月雪花にもけるべし仏〻

山の端のしら〻橋の梅の木の　義

花のまゝ鐘いとあるかの〻

仏〻の文字なを別書ふ記し好又

河内物語に歌しの〻の文字あり押紙

治定なく出るなり

仏〻人の宿に住るの春日うか　宗長

又河内物語に歌しの〻の文字とあり押紙

多くは切字なれ共治定なく出るなり

又撰要記に以四祝可用へし寸當時の字

以て押へ多くは切れ字なれ共可用へし

撰要の祝を用へし寸四祝のごとくなり仏〻

の文字を文字として押へ多くは切字なれ

又分る歌れなり

軒つゝ八家雑の歌尾に仏〻

仏〻口傳あり

かふの功字の歌

亭今集ふ業平朝臣

櫻花ちりらしくもれ花らくの
なかれとそこの水の通ひぢ人の

口集ふ中納言

流く淚河とそこの波り川
色ぬりはしの水の通ひ

後連俳ともふ山禄俳道し仙し引とそ
下ふそ口俳ひり

かをの変

かもとそこの水の分ひ所ひ字ひり口引とそ口以
口万葉ふ数意ともふ難ともふ書り又そ也し
花ふも月ふもちどそり亭今集ふり源氏物語
そり仙し三州のがもちのふとそこのふくふく花し変ね
連ひふ

紫の生ふる野べふも花の庭　宮碩

俳諧ふ

きり功下野口今日ふも山櫻　海宇

仙しふもの下ふそ別年ふし屋も

のみふの乃変

のみふの下ふ生紫先生淵変のふとそりふて

上の句のごとく切りて下句に前句の切字又切字なき句ばかりにて捷雪の祝ぎ言葉物二つうどんなどの多き物の集りしかばかくの如き心なり

連歌

雨のうち月の集もてくる月夜哉　忠雄
富士のうち五月雨ぞ雲の根ばかり　宇雄

仕立方ともに口伝なり又仕立

月のうち角力もとり多し　玉雄

仕立口伝なり又一代

蓮の実乃ゆ尽しなる蓮のうち　弼人

色いのうちなるもふ蓮なる物仕立口伝なり又蓮子の句の発句のうちなる切字

只のうち只のこゝろ乃ゆゑ梅の花　宇雄

仕立口伝なり

物の変　并　物のうち物のうちなる物の変

物のうち物のうちなる物の変

麻の中乃蘿い物の薗の井　紹巴

色物のうちこゝろなり仕立

鉄砲の長い物ゆゑ仕立ものゝ　乙別

色物のうち四形なり仕立口伝なり

しゞの変

連句はさく言のうつくしき事を第一とす人を傷
こと思しとのしがたきこと人類しのが文句は
物をかなしくうつの心ばりとなる言法師の祝
ばりと又石書しうつれば文句ばりとて又
東鄙風の狂歌は怒めてうしなが文句ばりとも
云り狂歌つかも山伏行つるこ俳諧
去年の春ちいさうしが芋頭　元廣
俳しがのてをこ口伝あり

ど文句の変

ど文句い色どと一物心をうて根をどり腎
初かり昌吐のさくどば意しつけ多ゑ歩ばり
ゑと俳しどうるうるうる

年ゝ仏ハ声々そうくてきりくす　智月
歌一ツ夜ハ夜ハと夫の言　重五
言のハハ蕃うきうてとまきうか　依ゝ
くのとくふ五言分三のひつのひしかしふト五
文分ふ當秀の物ハ並ても同分形又一代　玉城
君ゆふゝ　梅そうで檜木笠　玉城
仏ことと花ろる人の　長　刀　玉城
くのふくふ五言の分三のひつのひしかしふト
五文分ふ雑の物ハ並ても同分形也ハ
ひのひつくしの分ふ同分形又一代ハり
秀しぐれ富士ハ見ハ見ハ　玉城
外の九も母ゝ富ハきうきぬ

但ゝ五言分三の言の分ハ引文分も　荷分
ひ分ハひつくしふ形て同分形又一代
二声の分ハ同分形　家祖
五言分三の分ハ引文分ハ同分形也
ハ傳ハり又一代
自然の数の数吹く風ハ暑分ハ　恵重
くのとくふ上ハ引ハ　玉城
ても同分形又一代
時分ハ分ハくとくでいとふ
見ハ上ハひとハ分ハ現在の一文分ハて同数
ハ分ハ心ふ引ハ文分ハ残ハ多分ふ

留り杉り又一代　昌碩

白菊のちるなげかしき

仕立ものの口傳　又一代　高雅

巧なる山の手の口傳　高峯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山の滝　[illegible]

[illegible]

一代　巧り　京功字巧り　又　[illegible]

朝ぼらけ　雑　松浦　[illegible]

仕立口傳巧り　又一代　[illegible]

百杉りて　[illegible]　乃節

仕立口傳巧り　又一代　[illegible]

かつらぎの神八代　[illegible]　夜の雑　[illegible]

仕立口傳巧り　又一代　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

仕立口傳巧り　又一代

雑　母　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

雑　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

仕立口傳巧り　又一代

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

仕立口傳巧り　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

かくさねば　[illegible]　[illegible]　[illegible]

仏〻口伝ありて又一代
給ひ二ツ〻ヨリ行く秋で　玄弘
仏〻口伝ありて又一代
厚嘆なる心　仏ふかゝらねで　行弓
仏〻口伝ありて又一代
秋、浮き雁ハ行きまる人と　玄弘
仏〻口伝ありて又一代
風数ヒ吹て蓼秋歎ゝハ雅子て
仏〻口伝ありて又一代ありて古今集より三人の知
紅葉ぬる山ゝ多ゝ春ハ来ぬ。
秋ハ色〻の花ぞ有ける。
色ハ一首ぶんで文多二ツ有り前のぶんぶ乃

文字ヲ四ツ甘ヲ後のぶんハ五音ヲ三の仮名ヲ
ヨミ多ヲ有り狂連俳ヲ以格ヲ取し又一
代ありて
芋　栗ぶ猿ぶ　ぶんぶ　柿ぶ
又一代
月ぶ人名題の字ぶ天津空
色ぶハ上ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ヲ色多ヲ有り仮〻口傳ありて

古今集小序雄
哥の多ヲ詠のぬきこと

山のかー　春の織物いつちは

俳か

元日は因幡の日ことを意　義仙

玉水の谷は貢の畏ことを申すれ　仙花

ゑびすくべ餅ことくらは村祝の花　文弘

二つことを表のいかるる村年の春　義梅

俳ー　初春てふこ口傳ひり

歳貢の已が事ことを黒うるめ　重直

俳ー　ひわとうてふ第口傳ひり又一作あり連か

又雲の月ことをるゑ　山さとる　吉次

又一作連か

花はうは　山ことを入　志賀のうら　宗祇

又一作連か

降りくれよ春ことを明日のうの雪ひし

又一作連か

俳ー　雪ふる日ひ口傳あり　程　俳ーも　立格

又一作

ゑれびことひはきさらの東の庵　義吉

河氏の用只今宵ことを月　盆　吉吟

俳ー　八月ことは十九夕ことふ　能　付又一作あり

ことことひりてゑ　宵あるあり

袖ふことを舞屋花形俳合ゑ

俳ー　口傳あり

又云の〜文字りて品多分

梅ゞ〜昨日やゝ鶯花盛りか　大江
紙衣ふもまやゝ梅てんか〜　〃
仏〜友白ともゆ口仏ゆ

現在の〜文分の変

現在の〜乾坤ふ〜ふもゝ云り運ふ
青柳のうゝ藏道〜　春雨　宮祇
梅香ふもゝ花ゆゝ　朋雨　兼載
玉鉢の朋氣沼ね〜春の言

俗諧小

ゆゝ〜ふ〜山ちのぎがう人の鏡の勝　大江
道細〜相撲元年の花乃蟲　〃
池小我ゆ〜仮名書ゆ人　柳法
ゆ云る〜引馬ゆ〜　鮮男
一志まり哥て志の〜ゆ〜　陳夜の雑　蓼堂
子代の秋白ゆふ白ゆ今年末　釣言
勝麻の大くもの浦〜北の梅　利合
又一仏の現在の〜わり　童羽
うゝやゝ法世の北乃山さる　大江
ひゝ哥〜麓声戸無〜夜の帝　〃
うゝ仏ゆ白鶯ゆ〜やゝ〜夕ゝ　訓人
又一仏乃現在の〜わり

蕣蕣のさし身もおし　梅の花　太祇

又一代の現在のしかり

西東　義也同じ　秋の風

又一代　去る切字なき現在のしかり切字有り　蓮条　太祇

山路をもて行ぬ　蓮条

梅が香の苔原　浄瑠璃　卜枝

又一代

其の夜や蓬屋人かすし　堂の隅　太祇

又一代

はれるや　從弟ハ花の時　荷兮

又一代

花ふう自西我酒白く飯黒し　太祇

貧山の釜鳴ふ時く声寒し

海苔を干時　乃声ほのぐ白し

又一代

山ゆくり月ふ人のもの涼し

又一代

梨の花ゆかしく程淋し　野水

又一代

月ふれハ人の砧ふいとぐるし　羽紅

老ふの白髪ふ現在のしかり文字なく留六古侍

又一代連ふ

取青し後ふ色はく秋の年

仙人伯ふも式格ふ　仙人口侍ふ又一代

秋風や行勢の墓原狂濤　義孝
雁頸や屋の棟のうつむき狂歌　〃
石の香や夏草赤く露暑し　〃

芝木の匂口作又一作
松風の落葉掃く小の言葉　〃
笑仲の寢覚芝の山の月遊　〃

芝木の匂口作又一作
苔の松枯れ枯口ふれば狂客　松風

口作り又一作
沙弥しや鶴ぬれて海涼　義孝

口傳作り能味ふ
未詳の文句の意

花要云く一名ふまず一名なくまた未詳のこと
云說作れとも芝木の出しずゝ又渭三のこハ未詳
かりとうく作花要ふまずまたまた現在の
そもそも非作りまずハ未詳作り作一名ハ
未詳作ふ現在の中作り連今
也　ふまず一名ふまでの松の言

俗語ふ
そもふ月も夕のまず作吹　山　義孝
又一作連今
まず風ふず森ハ信太の　歌ニ　月柏
作ふ匂口作り又花要ふ
ふまずいかれ芝同下　山　柳　宗極

[illegible]が分神の昔は梅の花　肖柏

[illegible]二句は手紙の一の部に入れ申し候詩歌[illegible]

同じ[illegible]の[illegible]の中の別伝にて又[illegible]

なれども[illegible]二句は[illegible]

れば[illegible]

らば　[illegible]

[illegible]

月のうば　[illegible]の句入夜[illegible]の宿　兼載

伝[illegible]二句口伝にて俗諧[illegible]

[illegible]は[illegible]の大井川　[illegible]

花いらも　[illegible]　家さく[illegible]　風言

伝[illegible]句口傳にて

[illegible]の変　[illegible]

連[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

牛[illegible]の[illegible]の五月雨　一髪

伝[illegible]口伝にて

いざ[illegible]の[illegible]　蕎麦の花　猿雖

又山家初冬ちかき夕しぐれ切多わり
　　雪い水月の新もち海の景　有房
仙〻口伝有り又もかく〻笛の事
白菊の月の立てる姿もの　玄仍
星ふり〻く秋の木もたゝぬ家居　一井
花の山常折てうる枝もかな　池水
秋の夜ふかく孔明呼ぶ人もの　孔雀
世の中に鶴鶴の屋のしたもの
又一代連句
露ふきて木の葉のおちて秋もの　宗祇
俳諸
ふる郷くさもとり人の花もの　玄仍

又一代
新二今日ハ限りて雑毛形　尚白
又一代
名月や花ふき来る風もの　玄仍
名月や一次吹抜ける　木玉
まぶく刺〻笛の口傳有り又もかく
笛の口伝等の三ての義　別口傳
　　ハ　〻　の意　ハ　〻　笛の意
仙〻川抜〻の下ての上の毛形〻の所ふく
かく〻抜〻意ね川〻も白〻〻〻白〻多て
ふる形り

雪の旅てれくさいでいらっしゃる　秋の空　加水
人の家　舟泉

六月国水雑でいらっしゃる人の達ふ
又引抜き爲のうゑの達ふ
ひるすてり　九ゆらもまの花いれ
俳諧ふ

こゝに馬　桂ふうらうき　玉芝
俳諧引抜き国の心得ふ　国の同じ心
ふうり口傳ふ

ゆゝしの変　異　ゆゝしか
ゆゝしき

そのうゑい谷地ふうらう小夜砧　玉秋
月ゆゝのさでうらう　年の寄　丶

行くすゑうゑ　釣舟き　軒柳
俳諧引抜き　ゆゝしき　行引抜き
ふうらう口傳ふ　現在の一仰達ふ
満ゆゝ　空いひと日ゆ　巴方養　肖柏
俳諧　ふうら口傳ふ　又ゆゝ
ふうり古今年ゆゝ　もと引の　生涯
梅花　咲ゆゝ
山のうゑひうゑ　ゆゝも足引の
俳諧ふ　ゆゝ達俳ともゆゝ
引抜ふうら　ふうり古今年ゆゝ思考
俳諧ふ　流のうゑ　年つもり
花ふゆゝ　達きし　俳諧

門葉

[illegible]

以御格連俳とも[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋風も下葉[illegible]萩の露

俳諧

[illegible]人も行るや今朝の雪　[illegible]

[illegible]者等[illegible]行[illegible]夜の雪　[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぬの方乃ゆ風の方乃袖乃方乃袖乃方乃つけられさらん神の
功字ばりぬの方ゆ風の方乃つけられさらん神の
ぬゆく功方ふい可しゆ連ゆ小

心ゆゑ 橋ゆ ちりぬる 胡蝶 宗祇
言乃花 青葉まさるる 松の風

他詠小

清水 寄まぐいに見ぶと行ゆ盛 有常
春の羽もゆいつくろはしぬ初しくれ 在原
一つ脱て後ふ負ふ山ぬ 更衣 業平
雪くふ寝所四ゆ雪ぬ年の暮 在原
他ゆ きぬ とるてふちと口傳ばり
栗 稗 とりて 変ゆる ぬ 初月夜 半残

他ゆ 月ぬ とる ふ 口傳ばり又 ゆ と 留 ゆ 乃
小夜ゆ 千代 傳の 白い 橋 ゆ ゆ ぬ 少将

又一代

松風の新 ゆ ゆ て 秋くれぬ 素性
紅葉乃巣の 柳乃枝 枝ふ日い 今ぬ 九兆
古足袋の 四十ゆ 足ゆ ゆ 弁ぬ 風雪

又一代

布 所 ばり ば と 藤 と ゆ く ゆ ゆ ゆ ぬ 山口
他ゆ ぬ と 留 ゆ 古 傳 ばり 又 亭 集 ふ ゆ ゆ 今 知
秋ゆ きぬ ぬ 知 ゆ ゆ い 庭 ゆ ち り ゆ ぬ
庭 ゆ ゆ ゆ て と ゆ 人 い 松 ゆ
ゆ ふ ゆ ゆ 松 て も ば 庭 ゆ

いさの変

石知と言り寸文字ハ[illegible]

笑ふ[illegible]り[illegible]絶〻切〻[illegible]ふ

二集より自ら[illegible]ハ[illegible]もいさ　梅の花

俗諺ふ

人ハいさ觀言つゐで堀の梅　ウタ

何の変

何とゝハ蕉しかり

風の日ハ何ゝ[illegible]る　高歌　秋風

大津繪の筆の始ハ何佛　五竹

仕〻ハ口傳あり又一代

何たゝハ師匠の市ニ行く為　五竹

仕〻口傳あり又一代

仕〻口傳あり又一代　門梅人　九兆

清蛉や何の時ハ[illegible]の先

[illegible]何たゝ[illegible]ハ[illegible]の人　探九

仕〻口傳あり　鞭石

いくの変

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

俳諧小

いく年か心古江の松陰り　玉弘

蛙の羽乃等云友詠る塀の屋根　〃

俳莽いく死乃法の松　〃

年の姿破れ襖のいくつぶり　板風

又与乃守ちりてよりまいくつ乃多ちり

菊の香や高島の幾代の男ぶり　玉弘

俳諧口傳ちり

いく法の夏

いくつとせい薬しのてふ形り

子なを多い法ちるべき　年の姿　其角

又一俳ちり

玉の嶺いく法落れて月の山　玉弘

俳諧口傳ちり又いく法とせてを口俳ちり

いつの夏

いつとせ極い薬しの前より連ちる

今年多ちりれずいつ春の花　家祖

俳諧小

一里の岸貴いいつ冬　雀　一井

又一俳

又一俳

いつけ庇記其冬　秋　亀羽

初雪やいとは大佛の柱ダて　大江丸

又一代いつのとの夏分をとゝ落ちかゝり

無拔ゝゆうりやいつの　親　祭　丶

仏ゝ　芝まのかゝ口傳ゝ行ゝ

いづゝ　芝　いはちの夏

いつゝ新しの羽ゝ　いづこも　いつちも仏ゝ

日ごとの分ハ物の縁ゝ云ひくゞ　たるゝぞ

下ゝ　へ　ゝ　ゝ　ゝ　云　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　連句ゝ

梅　いづゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　朝　ゝ　ゝ

俳諧ゝ

笠　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いつまでか嵯峨の初桜
仇の花 散ずいつまでか忘れ草　素行

又一作

七夕たいつる神に参るべき　沾圃

作者口傳なり

いづの変　いづの変

いづまでか嵯峨のうぐいす心残り連歌

秋の色をうつしいづ若楓　宗祇

俳諧ふ

ひりや毎月枕もいづ今年渋　宜雨

作者口傳なり又いづいづでともかてもを

茶口傳なり

いつん　いつんいつんいつん

毛等ハ三ハ嵯峨ハ嵯峨ハうぐいすハ作者ハ

ハんとハハ心ハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

いづハんとハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

集ハ後成帰

いつまでか室の八潟心花もを

恋の手ふりを空ふまぐハ

又新撰遠集より定家卿

いかなる浦の初浪ぞ
うたゝねの後の袂だにぞ
見ぬ夢を知るべし程遠他郷に格別なり

いかなる夏

いかなる初の多くは閑しき多き心なり又うし
ぐしの心をうつり匂作りなるべし
物をうれ知るなるべし云ふは類しひすり又だに知るべ
ちなれは閑しきなる心なり能味以て遠き遠
月いかなる木の下閑の松乃風
いかなる空なる心なる多く匂はれ

おしうつるぐしをうつり又月閑しき多き心をうつり
吹き出たるバ花の香ハ松の風

他詠か

ちるもはいかなる秋なるの歌の言　破笠
又一作万葉なる人なる寺
玉津島なくしていかなる青なる
ちるする人の待ちなるいかなる

他詠か

猿を聞く人捨てる袖の風ふく　玄武
作いかなる閑なる心傳なり

いばらの夏

いづくにか咲けの初霜の白菊折り
建敦朝臣
咲けのちる花にまがいづる菊の花
六月十日敏行
玉ぐしの花のかつらやいづくぞぎの
宿の敏行朝臣
仲平山にて
仙洞御所
なごの本社にいづる玄本五　昌維
なごの亥
なごにこそ祭の多の初穂連行朝臣
なる人のある山の松　蓬　楊　紹巳

仙洞御所
菊の花ばかり塩の多ありて　谷づたひ　ヶ通
人のなごもるなるべし居多々の花
又一代
寄屋のなごり百菊の玉江丹　湯ヶ
供ヶ口伝有り
かりて　六月　まかりの多ふ葉
かりにこそ物なきいと紙の多の初穂なるこそ
ハ納らず依てなるこそ切れすかりこそ切れるの
金形りの多の　笠乃　まぶ　義
供ヶ上五文ふ形りて五文口伝わり又連年

雪ふりも果ぬ手ぎわり友の庭　待乙

紙潜小

つき鐘もしくるる時の声　玄祐

三日月の堤は雁すりてそのの花　〃

花ひらぐる菊ぬのとりの小のあと　〃

塩魚のつくる春日かな　更衣　風宮

初春のかそよ名ぶる松魚く　如人

梅香ふ苔の一ふり　衣　此丁　玄祐

昼寝ふ矢つき海也衣ぶり　〃

又一作

鞍のつくふ蓑こぶ衣ぶり　〃

又一作

初春猿も小蓑たぶぶ　〃

又一作

初梅折もふふぶ日ぶり　〃

又一作

新月ふ夜ふ春ふ夜ふ燈ぶ　去来

又一作

別離い年代ふ春ね　冬文

又一作

ふきりや鐘つくふ　ト枝

老ふふふ口傳ふ又連方ふ

治ぶる世ふ神の春

ふふふふふふ格ぶ下又

拾遺集ニ能宣朝臣

信山嶺ニ生ける杖ゆゑ
今万代の坂の名ゆゑ

宇治に行給

橋の立ちし山川の音
久しの昔ものかな月若ぐさ

俊連伝ニ云ふ法格乃道ハ口傳わり又文
本集ニ俊頼朝臣

牛窓ニ鳴く水鶏の声きゝ
波うちかけて雑ゝ哀ゝ

古今集ニ云ふ人丸

秋の山ゆ人松虫の声きゝて

行くいさゝゝ川
俊連伝ニ云ふ法格乃道ハ海

月の夜

月ゆゑ八幡ニつけ給ふ事ハ治定なり
隠れ住む師走の海のかゝいつゝ　哥
黒ゝ雲ニ沖の行き　哥　丈余
ゆゑ月ゆゑ文の紅牡丹　一井

伊勢ニ月ゆゑ口伝ハ
二股ニつけ給ふ
柏枝ニ鳥の居ゆゑ　鹿の角　哥
、

世をさとる花のも念仏申し給ふ　玄旨
月のこゝろ峰の梢切ふきり　明及

又一作

夕貌は千羽もいてゝ散じけり　玄旨
道布人の乃様い寄るとゝ枝なり

又一作

秋海棠　西瓜の色ふ咲きまさり　〃
年男ふ秋乗ひ給ひ　舟泉

又一作

月のこゝろ角ふ角力もとり給ひ　玄旨
まくとゝ木の葉口傳又名りとゝ口伝
わりゝ人のりなりとゝ口傳なり

名所ふ同名なるゝの意

当の日八幡の宮ふ塔り給ふ　羽笠
行くゝ先ゝ並江の人ゝ　玄旨
伝ゝ名所ふ功字ふいうゝ口傳わり又名
ゝゝる事ふ口傳なり

かりの意

かりの八月ゝゝ納ゝる事上ゝ
落しゝ住ゝ多ゝ木ゝ　玄旨
入り多ゝ羽ゝ忍給ゝ　稽の入りなる事
ゝ連ゝ小

[illegible]ふ　行火のうちより梅の中　鈴言

仕[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

連句

神無月紅葉も[illegible]

俳諧

張鳥　古草い梅やどりまで　[illegible]

一葉[illegible]物の[illegible]　一髮

庚講[illegible]　利合

仕[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉葉集より為兼

二月の秋の哀い深きかな
さらぬも露も又きえぬやり

俊成か

大内づくれば氷の上に
伊勢氏自口伝にあり又ゆ

和之

大内の夏

夏ゆえ山とは名ばかり
まぐて上の一分いとも
上の一分のうちの初より
はけ風初より建歌か

春は春とこそ似たり梅の花
ちりぬるかとは似ぬ似ぬ
ちりぬるかとは似たりとも
冷は冷とこそ似たり俊成か

社若

沼間

俊成

白人

高城

風は二階に寝たり

社宮

朋砚

青ざめの一筆は可有

秋の風

秋の月は似たり

又一代

いづくにか有ぬ有ぬ障衣

又一代

雁やこゑが落ふ似たり今朝の春

毛ものの口伝にあり又一代

[illegible]の巣乃[illegible]多り[illegible]隠れ[illegible]　路道
かくのとくふきねてまつ[illegible]又一作
行くまつ和[illegible]浦に遠ひつ[illegible]　[illegible]
又一作
秋の空[illegible]の[illegible]れ[illegible]　平角
又一作
雪の朝ひとり[illegible]亀を[illegible]澤多り
[illegible]口伝[illegible]又[illegible]口伝
[illegible]の意
[illegible]山[illegible]初[illegible]
[illegible]の一[illegible]

[illegible]の初[illegible]物[illegible]初[illegible]
[illegible]必得[illegible]新亨集に資業
[illegible]山の
後拾遺集に長[illegible]伝部
[illegible]夜[illegible]
[illegible]の池[illegible]
俗説ふ
氷苦く[illegible]が[illegible]
[illegible]口傳[illegible]　[illegible]
[illegible]の意

作者不詳ながら山さと多く初すり心得の上の口
口の多くさと同じ京寺年ト業手相ト
春日野八重の花いかやまと名所の
はなもみさも花り成も三重桜
建立す
花いなぶし枝ふこもれり方の筆
仇稽り
菖蒲七り軒の鶏のされかうべ　主作
作者五文今ふ年ふこ口伝又作者のてふち集
口傳ひり

ひりの意

作者ひりとふ行ふ切字ふのてすふへともつらしひ
ふりて切字多くしく就句
戒言てうめぬ事のひり年の芳　尚白
盗人ふ行ふ多夜もあり年乃多　主作
稀美有ぬ賀入ふ行ふ年の芳　李由
先我も雅の本もあり方本之　主作
作者ひりと切字ふ言伝ひり又
多ひ作ふ事ひ学多多鶏もひり　利牛
歌てうとぬ心ひ折もあり　有隣
社名我ふ発ひ月ひ方もしひり　主作
又一作
初方や門ふ橋ひり名ぐれ　其角

山口傳巧り

[illegible]の変

連句

[illegible] 泡雪つもる 春の庚

俳諧山口傳巧り 俳諧新句

[illegible]ぐ[illegible]の 杜若 枇杷

山口傳巧り

[illegible]の変 [illegible]の[illegible]

連句

時雨[illegible]山めぐりする 四方の春 兼載

[illegible]西行法師の家の集より

時雨[illegible]山めぐりする心[illegible]

いつ[illegible]とのみ[illegible]

[illegible]山[illegible]を[illegible]

[illegible]

又一作

[illegible]花[illegible] 都 人 〃

[illegible]百番[illegible]

[illegible]花[illegible]

[illegible] 宮の[illegible]の

[illegible]

[illegible]山口傳巧り又一作

俳諧少

いうでゝ人琴琴の袞ふ所にて　喬谷

ゝ句口伝わり又今ふも亭雪集より伝正直昭

蓮ゝまの渚ゝ人ふゝ心もて

行ゝ人ゝゝ玉ゝ打ばむく

又一体亭雪集より素性法し

はゝゝゝ春の山へよ寄り影ん

くれちゝいかゝげの花乃陰ゝ

ゝ海苔の句連俳ゝも乃ゝ又一体に集ふよ

ゝ人ゝゝ手

ゝ乃花を何ゝゝゝん世の中ふ

秋才もゝゝゝ物ゝ

ゝ海格連俳ゝも乃ゝ体ゝ式ゝ別ゝゝゝ

ゝ別の意別ゝ伝ゝ体ゝ別ゝ乃ゝゝ口伝ゝ

やゝの意体ゝ体ゝ

古今集より形恒

春の夜乃多ゝ乃ゝ梅の花

色ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俳諧少

福寿体やゝ明方の梅乃花　冨化

体ゝ口伝ゝ又一体連ふ

京ゝゝゝ初庵の小夜枕　兼載

ゝゝゝゝゝゝ春の山　紹巴

行俊ものも以前格ならべ〳〵伴ゝ口傳あり又一
伴ゝ連歌ふ
白しやゝ時ならで咲も梅の花　宗祇
行俊ものも以格ならべ〳〵伴ゝ口傳あり又一伴
ゝ古今ふ
淵やいもこも某流すと田川
多ぎうこもこもれ水の水泡色に
行連俊ものも以格ならべ〳〵伴ゝ口傳あり又一
伴ゝ高今集ふ素性法師
ふるゝ山ぶき　淵やはやぶく山川の
流れ　深ふ　ことはた波いと多て
行連俊ものも以格ならべ〳〵伴ゝ口傳あり又

一伴ゝ高今集ふ人麿
多のふ多ふ多ふ　ゝ　ゝ　ゝ

作しも知らし給ひける異しさ

連句

十ひとりの松ゆもえやい梅の花　宗祇

俳諧又は格句なへて作りえやいはのまつ集口

作り

ぬやの夏

連句に

下枝とて咲たくれぬや春の花　紹巴

嘯りすゆや山ひと朝日の鶯川　兼載

作り出る口作り又上京やと立くさ口作る

又ぬやの下ふる口作俳諧ゆも上格句なへ

ぬやの夏

京今集を素性法師

秋のよ長き思ひんきりくす

鳴くくタ月ひやしらてしぶ

川集を素性法師

ひとのよ人出雲らんさてて花

手毎ひ花たりて家つるゆ見

月清集を

下ひとりの花咲ゆ雲も移ひ

夢のよ大ひ出ひ

作り出る俳格連俳ひ

ゆ作り又一作連句

[illegible]
件の白口傳あり又の[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひ君が親とたりかまし

門集ふ人の知

我が君雅彼の浦みわたしに

ときめかせ三津の海人とうたひき

後撰集に清原諸実

くれそらはやみ雨ふりくる有しに

二むら山も都人まちすらん友

拾遺集に人丸

乙女子が袖振山のうつり香

久しきばかりなれにしかな

後撰に読人しらず

さどの夏

さどい異比やり多る汀路より又異比やり多る家ち

ア人のきこえたるこゝろをはずれもそりてこの初花

うけて答ある歌やり連句に

夜は月さどまでこゝろ江の夕ぐれ　宗祇

俳諧に

さど碁　孫八　原一　志津彦　友　其角

仙一　土五　文吉　ちよ　口伝

さどの夏

連句に

春山を笑くくも咲くもさどの花　梅の花

俳諧に

唐の吉野かいさぐ分きりが谷　意斗

仕ゝ[illegible]ぐ[illegible]ゝて[illegible]ゝ[illegible]仕ゝ

雜　多が　たゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

名月や海に吹き出す森の蔭　洒堂

艷なる女花をたぶさ大ぶりのさま　去来

作り口傳なり又連句なるべく

雅　袖　とうとう山吹の白けりかな　宗祇

袖珍抄なるべく雅とあしてでとあり澄（デデウ）なり同じ

扨なり作者今は雅袖とあしてでとあり同じ

とてもかまはず遠しかの作れども四読ふうとう山吹を

うとうとうとう

蕗の声　妹ゆも　御へに　言の巌
俤　口俤わり　俤　俤　俤

神垣や　おもひをかけし　注連縄　俊

作者未詳の句三口伝わり又其のてうちたる口伝

屋〻の変

屋〻にとりも紫ひのうらやまし

炭竈の穴ふたぐ夕べ　煙　亜汀

作者未詳の句三口伝わり

雪の変

雪のうへに月の影さえ冴ゆる明方今は眺めを有ふ望月

三人の鶴　なわ　春の池　仙花

作者の月ふ雪てハ切れ作者又ハ

雪てふ口伝わり

うしの変　羅　ちうしの変

かりにとりハ顔ひのうちの栗拾りを載集て

賛成

陸奥の神南俊川に咲く花の

いかなる色なるも人のそめしか

京の集物名ふ忠岑

秋ちりてうらかれぬる主なりやや

色はかへてもうらぶれぬるか

俳諧ふ

淡ちりも勢田ふ作者ける　杜多　無名氏

又一作
多くの人の月に向ふて
[illegible]
[illegible]
口傳なり

[illegible]の屋ノ[illegible]で[illegible]の歌

又一作
[illegible]の花の葉[illegible]
[illegible]
[illegible]

又一作
[illegible]も海苔[illegible]花の賣もで　[illegible]

又一作
夕[illegible]の白く夜の溺[illegible]紙燭[illegible]て

又一作
[illegible]

又一作
[illegible]月や[illegible]の行ぐ[illegible]し居て　存[illegible]

又一作
[illegible]て行く月[illegible]の窓[illegible]家[illegible]て　[illegible]
[illegible]
[illegible]口傳なり

下知の[illegible]葉

下知の羽[illegible]成[illegible]の羽とも云[illegible]なり
[illegible]け　て　[illegible]　[illegible]れ　よ
[illegible]
（文字の変

香を匂へる四の梅ハもと弘

生殺人　梅ハ心の冬　籠　加人

天狗て名をうれたり　弓の名　本弓の縄　高白

うき人の旅ともつゝ人　一夜すて三井寺多　初しぐれ　加人

寿の名乃行ゝバ名ゝ　神遊り　高白

名をむけておとゝしたり　乃月寺

又一仏

寝て〻ゝ人　蓮ゝゝ人　朝朗　キ角

仏ゝ白仏ゝり又一仏ゝり　連ゝゝ

雪待て花ゝ　ゝ多楽

ゝゝいの知ゝ落ゝ知ゝ　ゝ知ゝ

下ハの知ゝ宝ゝ　ゝ白ハ城乃

仏ゝて面ゝ物　集ゝ多ゝ　又

四時のうほゝ　ハ名風清　ゝ

仏ゝ口仏ゝり又一仏のゝ知ゝり　古今集ゝ

ゝゝ人ゝゝ

今更ゝゝ人もたゝ

八重葛　門ゝ人

ゝゝ　ゝゝ知ゝ

仏ゝ市格連　俳ゝ　又一仏

ゝゝ人風ゝ　松の重

ゝいの知の河ゝ　ゝ知の

文ゝ白仏ゝり

市文会の発句

建立の
四十八日花落し春の青木立
他諸人

さくらもとけ我も泳ぎ秋の蛙　大意
昔きけ秋又殿主人角力立　奥州
五月雨の八戒塚の雨けむり　鄙人

又一作亭集まる人々
今更山へ帰るも人もなし
市のうきうり我宿の秋けむり
口集り地野岑雄

詠歌の和尚の橋一四五六
さくらいきいきとかふ咲け
花は格建他ともみるへし又一作
代も春ようれしき声ほとゝぎす
作さう口傳ありて作下句の付文会品

廿文会の発句

その魂を羽黒のうへ法の月　天玉
肩衣八幡子みてゆ色花の友　松風
一月八戒ふ元鉢多くき　文弟
弱法師戒門ゆ色雇の札　き角
又一作

宮人と我名たつ白菊柴川　　義

又一体

義家の一夜きやと山の犬、

仏一口伝わり又一体

源尽に紅葉しつゝの行しくれ

仏一山の文分わりてもつ和わすれ口傳

相伝のも八格わり又百和の世文分口伝

下文分の意

古今集よりふの町

やりやまて山嶽たゝうてし

我世の中ふまてとびぬとも

又一体

仏法わり蓮の鐘の声　風麦

仏一口伝わり又一体　古今集十術延伝

宮ゝゝゝゝゝゝゝゝ

源義の山　寺ゝゝゝ

仏神ふ

莫も　御寺の鼓へりうて　寺角

仏下和の下文分口傳わり

和文分の意

納豆切り言ぢうて　仁王門　正時

又一体

小文わり蓮の鐘の声　風麦

仏一口伝わり又一体　古今集十術延伝

宮ゝゝゝゝゝゝゝゝ

源義の山　寺ゝゝゝ

仏神ふ

莫も　御寺の鼓へりうて　寺角

仏下和の下文分口傳わり

和文分の意

酒のめばいそぐ寝られ秋夜の言　大弘
仙〜ト知の秋文字口伝切り

ぬ文字の変

唐衣のたふいのじゐ嘉ス　童林
ゆすがずはい夜の中山を涼め　大弘
仙〜ト知の文字口伝切り

れ文字の変

狂いきれ門徒坊主の小夜衣　泊園
笑も太刀も五月雨紙幟　大弘
奥ゆかぶる幸を伝き法ちはい　旦来

おりて花入れさぐれ梅挟　大弘
西行の名も難もくれ乃の露

又

今たり人も年よりを初しくれ
仙〜ト知口伝切り又續文載集永朝
なるふも君ゆ切り切名れい
名ことの罪ハ上ちきいとなれ
古今集ゆ人ことの人ぐん稿元
ちれてゆく人ぐんいつれ
いつれ上ぐんぐんいとぐちれ
仙鶴ふ

初言ふ花の皮乃髪つくれ　大弘

又一代　青海波　吉兵衛

又一代

いざのぼれ　語我の鶴　於多　貞室

作　句口伝わり　又一代

何のうれしの　大師海　如行

作　句口伝わり　又

知の礼文　句口伝わり

又文字　義　みたまたの変

色は知のてをり　又文字　古

今集よりとる人知る

友山の峯　雲の上　ゆくえ

物　みも人我　山声　ぶ母

口集　山地　ちるが母　守り　ひと

知る社の　歌　ひと

こころ　そらい　ひと

口集　友刎

去りぬ　ぬ　ひと　苦　玉のれの

絶　てこ　ひと　人　ひと

俄　詠小

たゝ　ひと　人　ひと　友　雀　玉

歌　ひと　ぬ　身　ひと　鬼　祭

夏　ひと　泥　ひと　ひと　蕙

又一代ちかくなりぬれば橘遠海ものうみ人之知
玉川なる手朝布さらくも
昔乃人の恋しきまゝに
後建俗と京氏格ならんと又下知の其分
口傳なり

古今集

天下集十三巻
新云春ゆの山ふかく
花の散を思ひ
古今集十四巻
名ふかくて所行をそうとす帝花

我れ名路 ものと人のうるゆ
日集十あること
当世の八集より出るなれども
大もつゝ人ゝ
八集十四巻の系
名引のうしきの手かくつゝ
こゝしけくとも絶ゝ道て花
彩古今集十巻目
我れ新七七の社のゆふ
ゆてもゝ乃道ふ人すれ
俗語ふ
我と俗世二つふり新 出来仏 文永

仲之句多き之句俳諧

秋の木乃て葉ちるまが秋の風　太宰
たの木乃てちるは秋の嘆　泉
蓼ちるまでの淋しさ　有秀
初雁や行燈とる枕もと　蕉枕
軒近き岩梨前にが猿の足　み那
御火燈の盆　初るに　むし　舎月

又一仲

古帝花卯坊の杖ゆるがら　雪蓑
時乃舞春日　秋くるたるに　園指

仲之句両句口傳

又下知の句文字口傳

下知の文字の変　呼出す文字の変

則文字は軽き下知　知すり文仲より物ゆる
ほけ多心もあり仲之句二種あり　振今は
ゆるを乃ゆるは　ゆるはゆるゆるは
知ゆり又世の中は　ゆるは　ゆるゆ
ゆるゆるゆるは　ゆるゆ
ゆるゆるは　ゆるゆ
ゆるゆ

一ゆるゆの義の中略　梅の也　太宰
ゆるゆるは　俳屋が下の鑑乃声　〃
蝙蝠も山ゆる　浮世乃花乃色　〃
ゆるは　ゆるゆ　ゆるゆ　〃
ゆるゆ　ゆるゆ　初梅　〃
ゆるゆ　ゆるゆ　梅　探丸

月ふかく行く鴈等はなほ馬のうへ　仲永
白山〳〵て昌の花を絶えり　荷号
西の方に花うつもれて弱月夜　古芳
寢入りの物引着て花の下　仲永
曉の月をさそはれよ蓮の花　乙弱

又一作

我衣ふ伏見の桃の花ざかり　玄秋
唐ふ富士かすみの月もなしよ　素堂

又一作

春の雨方ともたを呼て居るよ　甫漳

作〳〵は口傳なり去等はいかに知のうるはしきこと
知るべき人は連歌か

待ぶたりふかたひとをと連歌
口傳は去人は上ふ同じ発句の上五文
字ふたとやいかふ呼び出〳〵のやうり古ハ
多くやとをとき前は上ひ多ひ上ふ
の詞今の世乃人能く云り有ふ別やあ
〳〵と知るべし切ふ上ふ古今等
新朝

ふちのくらいはで立のぶの絵を知るね
まつく〳〵たよ壹乃いしふ

仇語ふ

作〳〵は上五文字ふ切ふ上ふ　日敦　去林
作〳〵上五文字ふ切ふ上ふ口傳なり又一作

涼しさを堀るまさる井の枝　卯七

山の口伝わり

百舌鳥の居る井の梅よ神無月　九兆

鍋蓋乃きぬぎぬ　孤屋

ちはやぶる人の心は易さもきしの九　訓人

もちあの橋乃しくをよ伝ふの月　利牛

あもはぬ旅寝の昼を秋の名　玄林

又ふる宿多る竹の古今集ゆくみの町

風ふりやまて山彦ひさつてし

我世のなかうそ　ひぬとら

月集ふらんくさ　ひぬとら

久しの天乃川原の波〳〵守

君ゆ多りもあいぬおくゝてら

伝潜ふ

稲妻ふさそそぬ人の名さよ　玄林

折ふ月の火を乃乃重乃悪〳〵きら　探丸

庵笛乃上手ふ尽手袁さら

さら

ちる花ハ泡盛人ら　玉泉

ゝくのとくふうき祈を竹る〳〵又一伝

ものきハ〳〵ひ、さ〳〵祈のうれ〳〵きよ、

伝〳〵山の口伝わり又も和のゝ文今のてあさの口伝わり

ゝ和のゝ〳〵只のゝ文今とのあ前口伝わり

やれ　新〳〵ふ　やゝふ　ゝ〳〵ふ　やゝふ　ゝ〳〵ふ

やなのところのかの文ゆいまこぐのこゑかけ作ての
ことを念れ入れかるとこゑ作
むざんや將軍の下乃きりくす　玄仲
作〻ゆゆ口作作り又かしれるもやれるふ
心得ぬ事ども〻つのらかまふ〻こうを念れ
入るる義なり
傾城の親見まゆうしかの池の鷺春　和及
又續京今集千年の方夫作
くもらぬかまつ〻の鏡ゆけこゑ
櫛笥の宮乃秋の夜乃月
作〻ゆゆ口作ことを作るべし又詞花集
相模

住吉の網辺ふすやをくし
浦まふけぬ人いかるべし
ゆゆ泳格連俳ふ
二月ふもぬうりいやるかの花の夫　玄仲
ちるれ月ふりるりど云も心得ハ月ふ小月ど
又古今ふ
ふるでやる櫛笥の海人の袖だも
ぬれぬるめきし色いかるず
作諸ふ
為ふ事らく身ハつゞ物ふるやか　部人
又作
年の市樂香買ふ山〻だやか　玄仲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文字の変

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又一作

堂ゝや松頭解て見る春か　吉次

又一作

[illegible]

又一作

[illegible]

又一作

[illegible]

又一作

御金海や油のうれ酒五斗　[illegible]

又一作

[illegible]

又一作

[illegible]

[illegible]

文字の変

文字撥ゝハ文字ゝ[illegible]

び月に代に風に雪に移りかはるを見
つゝ思ひ連ねて
明日もまた旅に出ふ大江の冬霧　宗祇
俳諧の口傳
又やまた花を朋霧冬ごもり　肖柏
俳諧の口傳
年も経ん磯辺の松の下陰に　昌叱
俳諧の文句を解き連ねて口傳連俳と
もいふべし俳諧
醉て寢ん花を枕の石の上　玄仍
月見ん伏見の城の柱廊　玄朱
俳諧友句ともの口傳

旅人の後もしき
ぬ明けて花に二年橋　玄仍
夜の俳諧問ん　花小　陳
有りしき姿形ん　うきはを負
ざともふ稀書つゝ　年　枕
ひやめ仆足を結びんとの緒
旅の実に俳諧ふと　在乃ちと
天に世事を有ふけん　菴の月
山海ふ難を在ん　笠しくれ
旅人に我名　軒　初しぐれ
松ふ山にて庵と有ん　朋きりめ
ゆりもてなふも変ん　建きれ

玄仍
立水
千角

げごの下乃宿と云れん花の宿　部人
一人乗る舟作こ[illegible]　周也
河内屋根こ[illegible]　尚白
[illegible]　村くれ
[illegible]　里　[illegible]

又一作
[illegible]　花　此　卜枝
[illegible]　一作連句
[illegible]　花　衣　紹巴
又俳諧ふ
[illegible]　[illegible]　枳風
[illegible]　[illegible]　[illegible]

今日ばかりや書つけ侍ん笠の露　、
君次多けりし物こゝ[illegible]　、
[illegible]　、
行[illegible]　、
俳[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　鐘の声　[illegible]
地[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　門　[illegible]
[illegible]
夕月夜行[illegible]　卜枝
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]　、

七夕の魂あつまりて枝葉にうつる　宋人　魚洞

花筆の句に口伝あり又一件

さゝやかな人の浮世夢はかなき行く　玉水

以句口傳あり又一件

うつろはぬ綱代の水奥深て出る　〃

月ぶしを形知り〻事の影さし　〃

風ひゝや　古井の清名七向　〃

光門乃花や上戸の七声さし

本ゐ殿り高き桑ゝ乃花さし　存内

花筆の句に口伝あり又一件

ゆゝもあり蚤白さまぬ風もゝ　玉水

ゆや法しこゝゆの母も蚊の喰ん　風南

初雪柔四つりやうん　輝やさん　玉水

仙〻以句一流すあてゝやうん　ゝゝ八月寿〻手

又花ゝの句に口伝あり口伝ゝ一字を祈主秋

ゆり文字一字にて仮名二つ三つ續くゝもゝ一字之

祈ゝ行ゝ手　仮今八月ゝ　備〻ん　なゝの

類しかりしゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

月又月ゝ月ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

名花もゝ一字を祈ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

まゝの美那ゆり仮今八

春花月ゝ花ハ枯ゝ　梅の外

花ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

花ゝ　秋ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　遠き春ゝ

[illegible]

一句　[illegible]の夏　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又一作　風雪文章

面白し言ふやうらん　冬の夜　[illegible]

[illegible]口侍りし又一作

[illegible]すれ流るる年の淀うらん

又一作

[illegible]の思ひ巨燈[illegible]ひ[illegible]

又一作

[illegible]の葉や一つ[illegible]うらん　秋の風　田舞

又一作

[illegible]知れ戻り[illegible]折らん　[illegible]の[illegible]　[illegible]根

行く人や[illegible]うらん　七[illegible]　朝及

又一作

物すごや昔の[illegible]の春うらん　[illegible]人

又一作

夜著の[illegible]　[illegible]天は[illegible]　[illegible]

又一作

秋風や[illegible]の[illegible]淀[illegible]　[illegible]

又一作

[illegible]　[illegible]の面[illegible]　[illegible]

又一作

[illegible]宮や[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]口侍り　[illegible]

二字撥三字撥のらんの変

らんとゝふ二字を祢三字をれのらん作り吹二字を祢のらんとゝハ違ふ

子 敷ぶ多くらん 山路浦 伊し

仮名口伝わり 枕詞

袖ふるゝらん田隈の海人のひさかたゝ 大雪

仮名口伝わり

一ハい男ちうらん うるはしき多 一升

今日ハても小松屋ふらん牛の負 雅亨

声ちゝハ船も帰らん 船月 再 御人

死ぬまでゝきたちうらん 鹿の魚 山葉

きたのうゝゝゝ仮名口伝わり又上ふ ちうらしの身

たゝ高多多たり

多れくも来ぬくらん月の光 去夏

年の市多れたゝ呼ちうらん羽織殿 キ角

急ぎハらゝ二字を仮のらん作り又三字を祢

のらんとゝふハ

青ぎしゝ字屏の穂ふ ちうらん 天武

白壁家や時雨の花八咲ぬらん

千年ぬらんまゝらんちうゝゝゝ

らん作り仮名ハ生ふ

二字切のうの変

連句

花や引く久保袖乙女 本阪路

狩人いなかうたん風もあり

咲うばせて身なやの山陽 宗祇

いつかさん山の白雪月ぞ出 宗長

仕まつる口伝ばかり又俳諸

夜神楽や鼻息ぞ〳〵西のうち 宗用

竹ぞ船連句は竹ぞ〳〵ふし 文雄

仕まつる口伝ばかり

三句切の変

連句

花もぐ嵐やとのん変の庭 宗祇

月夜ばかりやたゝこと夜の雲 宗助

吹ぬ風ばかりやいとゞ尽す 栖り此

乞ものゝうたゝ口伝ばかり俳諸

菊〳〵一ぞいい栖こゝとゝ夕の雲 毎論

栖栖こゝ若葉ばかり 宗牛

仕まつる口伝ばかり

四句切の変

連句

花ぐもよ栖ばかり はたれ松の雪

俳諸

咲やちるや花小町の化粧食ず　不角

仕舞句三口傳伝り

七文字切　一名たまゝ

蓮台寺

秋風も穂ゝ出る秋の声　宗祇

今日とゝ人の手きし蓮台寺四方の言　昌琢

名もさゝびきらげゝまゝ　孰　云

俳諧小

縫物の人まゝ人わかを着衣をしぬ

我宿ハ四角なる点を窓の月

一説ハ八句をとゝ五ツ名の句をとゝハ非伝

五十日ゝも三人きたる日仏

三伝口伝伝り又一作蓮台寺

丁手ゝ分神の苔を梅の花

俳諧小

蹴鞠やてゝ花を言の月　孰

仕舞句三口伝伝り又一作

文衣いゝ風なか夜ゝ

孰ゝ大井帝なる月夜　〃

橋ゝ松ハ二本を三月部　〃

仕舞口伝伝り又一作

閉扉寺を移て三の〆ハ伝を煎仏　〃

一説ハ八句を探丸の句をとゝハ非伝

菜園の何れの花も多くの蝶の
飛ぶ〳〵の蝶多し我を行き手
又一枝
筆の穂の花小雛の同じもの哉
作〳〵と咲く口作り

大かたの京
色花大輪ばかりなる中に連方に
芙蓉 桔梗 風の道行く 秋の月
又和方にも大きかと云へ古今集より手爾
遍照の門まりとも云へ
なるべき我身のいでうまれ

俳諧小
うちなびて天の原こそ
景清も なんぞの堅ふ七会 流海
作〳〵口作り

三度切の発
色花三名切とも云り
月に青柴山 松桐 素堂
墨さ〳〵〳〵馬の屋 桃もと
梅 芙蓉 輪の 宿の花 汁
作〳〵三度切ふい過 秋三世の心を
〳〵口作り

巳切の変

年の寄たがいまこそ見越づらし　伊勢
日本橋今日八富士詣初しれ　青々

仰〳〵口傳なり

玄妙切の変　別伝の玄妙切乃変

玄妙切言葉太祖句留とも言連句ふ

松の〳〵実や言ふ葉もらん　心敬
月細〳〵桂や前しらくすらん　宗牧
水宮〳〵山や言ふ葉もらん
仰〳〵是ハいと松二句とねなり又連句ふ三

句ぶ名ハ
名で高ち月や桂を折ねん　宗祇
仰猶ふ
明方ちぬてぶハ為ハ句ハやらん　林間
是ハ二句とねなり仰〳〵玄妙切ハ一ぶ句の
分別言葉ハ又三世不可得の傳なり口伝なり
一伝の玄妙切なり
松魚賣いろ〳〵る人を醉まん　宗祇
言ハの洞や為ふ氷ハ〳〵ん　加人
松〳〵ふや前給書ん〳〵と恨もん　〃
三日月や言葉の〳〵ふべ荒もん　宗祇
白鷺雪ふや咲ハ〳〵ん　〃

老ちの句ここに行く〳〵四傳行り

句切の発句の内変

俗ふ老切 風発句ここより連句ふ

月の夜い松原をえり月夜つが

二人行く一人いぬれば二人

俳諧ふ

月の夜い吉原をえり月夜つが　寸蘭

行とそも言ふ言ふ言ふ

老ちの句切て月ゆきの物ハ

ハ松原をえりをハ月ゆきの物ハ

行く一人いぬれば二人

の心をもて又吉原をえり月夜のをもて

て多ハ月の夜の心ハ又行とそも言ふ

世界ふ言ふ言ふ言ふ

ちとの心ハ位ふ連句ハ當付如ぶ

なる句行こと老ち上古の一体ハ

心の切乃句の変

幸時の松ハ花をえり花ふ

作ふ言ふ松の松ふハ

月ちの心の切乃句ハ

初雪ふ鶴ふ新屋　訳く朝ふ月　又邦

山橋尾ふく物　ちく　二つ　寸蘭

神送り荒仕方の宵の去大根　酒堂

蘿蔔の目の今や芋ぬと雪鶴　素行

職人の惟つ芋ぬ方ク〻まく〻

一行ふ山ゐ去芋ゐ山ゐ

何ぞりとうく〻ゐ山ゐ秋の風　文考

須磨ちふ義ぬや留風く方園　素行

亀の甲意く〻原吟ハ芋も芋　飛

く〻ゐ少笑ゐ山ゐ稲と極のも　牧

又一作連句

風きくもゐ山ゐ社宇

神坂ふ山ゐ天不き社の言

老ゐハ世初の別伸ぞり仙稲ふも

ゐ〻の記動ゐ山ゐ加ゐ山ゐ　仙九

原ゐ山ゐ行常勝可ゐ小菜島　文考

仙く〻老ゐの月く〻ゐ行ぞり口傳ぞり

の問答の切乃変

ゐく〻ゐ山ゐ行ぞくも　緑の風　素行

演義秋ふ筆ゐ山ゐ年の雲　呂凡

仙く〻ゐの問答ゐ芋も心切の別伸ぞり又一

作句

曙やうゐ七夜も三日の月　素行

塚も動け我入泣声い秋の風

又一作句

[illegible]

仙人[illegible]の海　文鮮

御[illegible]口伝有り　又[illegible]文字の[illegible]

中の切乃変

一[illegible]切[illegible]

別伝有り

猫の恋や[illegible]の種月　文鮮

[illegible]

[illegible]の[illegible]の夫　利重

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　文考

伝[illegible]口伝有り

擬物の切乃変

世[illegible]代の[illegible]小田の行戻り　文鮮

人[illegible]家を買て[illegible]秋八年忘　文考

金[illegible]寝て[illegible]の夜着の年忘　加行

[illegible]寝[illegible]寝[illegible]

伝[illegible]擬物の切[illegible]口伝有り

自問自答の切の変

沢庵の墓[illegible]秋の[illegible]　文鮮

[illegible]大一人[illegible]年の[illegible]　荷号

[illegible]

又一代

名月や富士[illegible]駿河町　素龍

仰せ出も四切の別伝なり口傳なり

相撲の切の変

人の仰せ猿も見たくも秋の風　珍碩

[illegible]も[illegible]の瓜紅殘す方丸け　探丸

富屋より長い塚の堂　李由

[illegible]　[illegible]

仰せ出も四切の別伝なり口傳なり

隠形互形の切の変

新[illegible]き茶袋一つ冬籠　荷兮

[illegible]時分　里圃

義[illegible]　[illegible]

[illegible]人[illegible]　[illegible]

仰せ出も四切の別伝なり口傳、

蠟切の変

頭切は一名切ともいひ也四切の別伝なり

[illegible]　沾圃

更衣十日[illegible]花さかり　野坡

仰せ[illegible]口傳なり

童形切の変

降らすとも梅ぞ春を忘れぬ　大弐

春も尋ねぬ人の月と梅、

参詣のたびに人事山さくら

又一代

秋ぞ思ひ毎の色ぬる花茄子　大弐

又一代

うぐひす事の百宴くの梅　柳、

又一代

初雪や袋の中の月と花、

又一代

雪ちるや言ふ〳〵なれも蓑と笠、

仲哥あの月と口伝あり

[illegible]の切り変

仲哥を[illegible]

[illegible]ともあり

[illegible]堂　伽藍　八重　桜　大弐

口伝あり又一代

三日月や名を[illegible]石山　笠山

[illegible]代の物[illegible]字[illegible]の橋[illegible]口伝

又一代

世[illegible]　[illegible]　大弐

[illegible]の秋　大弐

[illegible]

傳[illegible]又和[illegible]

[illegible]

思へどとかくもみたまはじとや　君
今日からとも明日とも知らぬ身の
知らす我　身はいかに　今代うべきと
古今集　よみ人しらず
稀たちくれば　ちりぬべすなり
古さとの　人の　まてもこぬかな
同集　よみ人しらず
世の中は　なにかうはくらもも
なにかとも　とりてなりなれ
同集　伊勢物語　よみ人しらず
思へども　たのまぬ　なかの
いかやあまい　思へ　うしかし

同集　伊勢物語　よみ人しらず
我を思へ　人を　たのめ　頼しや
つらかりし　人の　我を　たのめ
文集　よみ人しらず
石清水　七瀬の　流　なりぬ　とも
我は　流　ます　君を　ゆく
をちかへる　初を　立　稀　今　昔　文
引の　山の　山　守る　山も
行　年　ましも　行　年　ふ　ゆ
清少納言の　ゆ
稀　ぬ　ぬ　ぬ　の　山　乃　ぬ　ぬ　在
ぬ　ぬ　ぬ　乃　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

新京集より資業

[illegible]

山人の[illegible]

[illegible]

新京集より西行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新京集より業子

[illegible]

我行く

京集より菊亭朝ト

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蕨野の花ゆふかぜの春
曉をむかへてまつの帰雁　文方　部人

又一体
柳に干ふ夜ちる花の立姿
秋風ふかれくる雲の枝
柚のかをるむしろ君ゆ釋迦の間　女　羽紅　玄朔

又一体
仏合しや豆の粉喰しや橋将

又一体
河豚汁や鯛もちるのは無分別

又一体
等のちりぬを雑煮たべき　九兆

又一体
雑煮居りて石ゐてうる初梅　常牧

又一体
庚申て山うるまつ寺ちる桐　玄義

又一体
ちり積ぬりの重ねふついてうる　少坡
仲しきの八重ふ紅口傳所

二月初の亥

達磨忌
花の紐桐の髪を時雨風　宗砌
五月雨の嶺の杉風谷の水　周阿

仙人達行出でたる三位切の句なり

夕べも朝もつまる所の花　玉笥

侍宮を恋もまつ毎玉笥

又一仙

父牡丹母芍薬の花

仙人口傳なり

ともと同名なる句の変

人くくとかくれ宮くくも　玉笥

ちらばひよ盃ちまちまを踏ぶとも　釣言

仙人口傳なり

祇と同名なる句の変

しら河や田の行く櫻の見る度　玉笥

花ちる宿ふまぬ人や終りや　玉笥

仙人口傳なり

まぐと同名なる句の変

初雪や仙の常の見しなで　玉笥

今りとん藤の杖もつる日までぞ

いざらんとうとうとうでぞ

仙人口傳なり

心と同名なる句の変

題しらず

春たつと春のうち　板屋ゆ　尚紙
かり寄きたるうぐひすの　なくこゑ　家頼
山風に隠れなく春の月もかな　兼載

題しらず

春たつと残す白弦

月やはるかぬ似たる暗うき今宵ぞ
山や春ぬ高き初ぬ　家祇
春やうる山の端白き雪ぞ
袖ふれて春の花ぬ　家祇

月づく空ハ春の光ハ　肖柏
花ハ春ハ色ハ心ハ　家祇
仙ハ口傳ハり

春ハ初の夏

題しらず

庵の春ハ夏ぞ秋乃山　当代
緑山ハ春ハ夏ハ秋の色　家頼
ハるゝ地の文織ぶる冬の空　家頼

飽時ハ

玉しきの衣のへ帰り花　荷兮
苦しハも春ハ金の袋　曽良

又一作
[illegible]や[illegible]と[illegible]の[illegible]の通ひた　[illegible]
作[illegible]と口傳わりと又違[illegible]
[illegible]と春日の[illegible]く玉清宮
一説に[illegible]を大[illegible]と[illegible]わり誤[illegible]
[illegible]切わり又
[illegible]と青葉[illegible]の日乃元　大弘
作[illegible]も世[illegible]大[illegible]と[illegible]誤[illegible]
と葉切わり
て文字五切多[illegible]ぢと切多[illegible]
作[illegible]ぢも[illegible]ぢと[illegible]切の別作形

扇[illegible]て作[illegible]紅の花　大弘
五つ[illegible]海老つゝや[illegible]て鯨一つ　之道
背戸の茄子[illegible]ぢて[illegible]きりくす　日葉
[illegible]作家[illegible]て[illegible]ら[illegible]と[illegible]て　右　猴　九兆
鍋[illegible]ゝ[illegible]めて　右　猴　鼠宮
又ぢ[illegible]ゝ多[illegible]わり
花の名乃わり[illegible]も知ぢ四十鶴　大弘
又一作の[illegible]ぢ乃わり
乃わ[illegible]ぢ[illegible]れで早苗　毋　利牛
又一作
汐部や鶴脛[illegible]れて海[illegible]　大弘
無海山や吹ゝ浦[illegible]て[illegible]ゝ

又一作
名月の花ゝとゝえて　綿　畠　玉水

又一作
園の夜や菓子まじりて咲みつゝ
戦ひうや稲まりみて月ぞうゝ

又一作
清く開く耳ふ香樣てゝきます

又一作
いはでゝ言はぬ人ぞ咲くみつ　み邪

又一作
言うゝ泉やとゝちる紅葉　玉水

又一作

多九ゝたが組淵で生沖乗　其角
仏〜丁丈ゝ丁丈ゝの口伝作り
べの方の切の変花べ切り我ゝ留多多

べの切れ方を心切の別作り連方ふ
香ふでちる稲ふ花べ　蹴　楊
他語ふ
雑炊力名一刑ふ冬　篭　千角
勝ちさ丁ちえ花べ納豆　汁　許八

又
静ふ夜ゝのゝけべ　榊　ふ
毛天ふ音ふ花べ吹ふ

[illegible]

[illegible]

## 雜の条々の意

名所ふるさとは雜のうちも知るべし。ふるさと
とは処の名をいひ又季なきとは八句の
心ちをいひ名所は所の風情も尽
しつくしたるもの也。雜の句も名所の
名所ふる雜の句乃至は三句の中より又
ひとつ二句の中より何月等
ひとつ紀行等言ふもいとはるべし。依て無季なる

句ども又云意の条々の部金乃条々ならずとも是に
準ずべし。名所意味等の題は春夏秋冬なる
ふる人ふるさとふるとかりそめ今も意味又旅
ふる雜多し。仮諧の句は俳諧の句春夏秋冬
ことべし。秋なる句中ふる中ふる中ふる
なる秋ふるべし。又云ふ和句乃撰集なる
雜と云歌なれば雜の作と云ふ連俳とも
ふこと名を付べし。今の俳諧ふる評すべ雜乃
条々八条々の部ふ部五ふ八曲節と云
ふべし。和諧吟行ふ

## 雜

雜とは雜事なるべし。

かくのごとく雜多れどもこの浦山の景情を尽すべての紀

行ふもまうでゝ行りぬるとて作りたる古歌物の法師
なりけるを弘前元禄二年の元日の句りとゝ
かくかの行脚のうちにおりゝとまりまり
初元禄二年三月ふるさとを出て奥加行
脚せられしうち奥州の法師の法師の
ら行ゝ句を風ゆるす必さのいかうまを見ゝ
ゝ

安行ちゝは杖突坂を落馬ゆか　大坂城
を八武陵ゝ行賀の宮ふ帰ゆゝ馬の岸鞭うち
ゝりゝ三所書ゝり又
唐辛いやがてゝ　枳殻　ゝ
を八舞鶴　低徊ふ山ゝ立人のゝどを祝ゝ多ゝ句ふ

上を也雑ゝり又大和行脚ふ
歌書ゝりも軍書ふ典ゝ　吉野山　文考
ゝ丹後の宮天の橋立ゝ
橋立や文殊の智恵の髪鞭鞭　、
又郡中の出立山ゝ
禪ふゝ名のゝや恵乃山
立山ゝ名のひゞきゝ部牛を謎詠ゝ
ゝ部牛の立山又ゝ
乃湯殿山ゝ恵の雑乃髪ゝ
海ゝふ雨や恵ゝ　宿　大坂城
我恵ゝ　ゝ　桂馬ゝ
又山ゝの恵乃ゝ

淀かわの水ぐるも摩耶一棹車　文考

傾城の恋乃うらみ　秋之方

名ゝ多かゝ鏡　左　京の三ツ巴紋

又名所の雑ふ

七浦や一字の数　一字はゝ　文考

宝永のもとめの二人湖南の新美山としての舎乃

発句の形り名所ふ雑の作ふ　ともも是すい雑いも

決しるくまもと雑の作ふ　ものもわゝすいとゝ

ふもと季の俗方はけゝ　季の格ともうゝきりやとて

されども是ハたゝ有減浸の文考。新製形式

腸ふい今日の模様を宝ゆんとて学の腸とはけり

り又長谷川の移川乃宮とて世季の移用とゝ

集ものゝ雑の移用ゝ数りて

うれしさもうはさうゝ毎の移の字　文考

腸ふ記義の用ハ山ゝとゝ　蝉さゝ紙を

張てゝとゝ作りゝ　ゝゝ程是ゝの新きなゝ

くゝ味しゝるゝ

春季ちゝ元日ふ用ひる句法

連句ふ

めはゝゝゝと年も不ゝ　且ゝ於　玄的

今日とゝゝハ多代の初乃始ふも

他諸ふハ乃年老懐の試毫ふ

年ゝゝや猿業者ゝ多猿の面　玄的

いまハ五文字ハ延年の意ハ篭のうち梶の葉
旦の詞ハ花ハ長きも雑の行とやきん或ハ無
季の格とやきんと仰せ事ハ今ハ季の詞々
ちがれども一句ハ花ひらたる句ハ自然の一興
ずい発後ちゝ下ハ毎月かりしハ格ありよハ海
苔くゝ

## 五音連部の発句乃哀

五音相通の句ハ皆礼又祈禱のこの時ハ用ゆ
一就ハ神祇奉納の句なも五音相通ハ
ゝ就ハれども蕉門ハ用ゆ〳〵又異且の句
又異且脇第三ハ三ツ物ハ用ゆるとなも五音相通

ハ用ゆるゝ就ハれども又蕉門ハ用ゆ〳〵ゝ
前の就句ハ撰集ハ山ゝ也り時ハ用ゆ〳〵又
祈礼祈禱ハ其の発句ハ相続の就句ゝゝ
也ゝ正の就句ゝゝ又五音相通ゝ
又横通の就句ゝゝ又鄙の就句ゝゝ
〳〵次ハ志ハ〳〵作りハ
先正の就句ハ五音相通ハ
乃続ゝゝ縁の句ゝ合ゝ
ハも縁言ゝ
春面も布留の世や神の奏　真室
歌軍文武二道乃　こうち
ゝゝハ人七五乃ゝ集縁言ゝ

正の親句なりまべく祝言初猶の句あいこと
緑のあり〜ゝゝ九輪〜〜人有ふらく續ぶ有りゝ
ゝふも緑言なりねる多ゝゝ
まゝゝれ乃布曽の高橋多親て
波ゝりゝゝゝ立ゝ多りゝ者れ
ゝゝ所ゝゝ緑ゝゝ八緑ゝゝ所ゝゝ緑ゝ緑ゝゝ月
ゝ所りゝゝ正の親句なり又連歌ゝ
浅緑春ゝ先多ゝゝゝゝゝ　紹巴
ゝも正の親句なり又右ゝ多ゝ耶の緑言所ゝゝ
きゝ五音相通ゝ多ゝ或ゝ鄙言の親句ゝゝ仕立
五ゝ多ゝ通の句ゝ奥易征伐のゝゝ所頼朔
表朋ゝ竹ゝの軍ゝ名　元　川

ゝ腸ゝ
君ゝゝゝゝゝゝ多ゝゝゝ
ゝ八榎原清太景季。附多ゝゝゝ五音の外
きくけこ　ゝゝ五文字ゝゝ五ゝゝ七文字ゝゝ
らりるれろ　ゝゝ文字ゝゝ
ゝの文字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
富士の山武蔵の国たゝゝゝゝ
ゝゝ五音の判みむめも　おいう仁ゝ
ゝゝゝ　ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くすつぬふしゆはかくらもを横声
ゝきりいうハおかさたなはまやらわ
ゝて八七五のゝ〜らてゝりたつかゝ名たるゝりゃゝい
右のごとくふ五言右通ゝて住ゝくゝまゝら〜を
等の作連ゝ可ふもゝりゝ又鶯清の親句ゝゝゝゝハ

松の花　朔日　の鶴ふゝゝゝゝ

ゝいゝ松のゝゝゝ松の月文字を長くゝゝくゝゝゝい花ゝ
ゝゝゝの字ゝゝるゝりゝゝて七文字のゝ〜
らゝゝ松ゝゝゝゝゝゝ受て七文字のゝ〜
ゝく長ゝゝゝゝゝ又雀ゝの月文字を長く
ゝの五文字のゝ〜らゝる受てゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ親句ゝゝゝゝ又ゝ初祷祝

言ゝゝゝの発句ふ正の親句ゝて附合ゝゝゝゝゝ
ハ腸のゝ句ゝゝゝゝ発句のゝの五文字の縁
ゝを受て腸のゝ句を作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝも縁言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
腸のゝ乃ゝ清のゝ七文字乃縁言ゝゝ第三の上乃
五文字へつゝゝゝゝゝ又八七五の間ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
常のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
編も発句のゝ乃八文字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝも右通ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仮名ゝゝ第三のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

き又七五の間をも形五を通ふまで〳〵又四句め
いとれるおくをも常のごとくふす〳〵又横声又響
の親句まの叡句をもて附合ふるなる四得方なるふ
ハしく〳〵又祈禱娑婆等の叡句ハ別箇
別箇形箇なるもて清宮〳〵美しの切字い
ハたゝしゆもて十八の切句をもてハ切字ハい
と知ものゝ切りて和通等をもて少〳〵又句形の前
の叡句ふ七五の縁言をもてハく五をもて通ふもてまた
ほかハ朝伏の連句朝伏の俳諧をもて嫌ふ形
似し朝伏ごとをもて常ふこゝろハ人を咒ひ殺を秋
ふをしひるさまハいとまもて敵味方をいとまもて
敵を朝伏をもてハ敵の悪心を和〳〵ぐ心を

らハくするごとく気をもてり悪念悪魔を祈ふと
云気をもてり俗今ハ病人祈禱形をもて連句に
も俗諧ふもいるべき〳〵ハ形を文句ふハ祈禱
をもてけがれり病を祈りて和〳〵ぐ心のごとく
又長行勘解由左衛門ふ祈禱
をもての連句乃叡句ふ

さきらけてらはる色ゑをもて　山　橋
を腐り

花ハ花のかゝるきし　そどなる
をもて勘解由左衛門軍ふ向しがを時敵方
をもて山句を開て敵方りの句を引率て
きたるなびく色ゑをもて　山　橋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二日ゆもぬるゝ花ぶかの花の実

[illegible]さるとも人の[illegible]れ

通ずるとて[illegible]ハ通等[illegible]ハ

蓬門の[illegible]

花ぶかの釜の心得の変

達ぶか

花ぶかも時[illegible]

二月の花ぶかハ桜ぶかの雑ぶ[illegible]一ぶかの雑ぶハ

らハなきゆゑ花ぶかの釜の習ハ花ぶかの

一ぶかの[illegible]ふ[illegible]一方ハ[illegible]

ふぶかの[illegible]時[illegible]雑ぶ分

明ぶかの雑ぶ曰山梁雌雑時或色山ぶ雑ぶ

帰くぶ周[illegible]ハ時[illegible]

乃刻ふぶかの結ぶ[illegible]雑ぶ知[illegible]

外の花や行[illegible]

色ハ四月[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

士師草の[illegible]

名取ぶ[illegible]

名[illegible]ハ行方の國二[illegible]

二[illegible]の浦玉椿[illegible]

ふ[illegible]

の句を

鈴の二尺ばかりなれば行く秋と

を二尺の浦乃枕刃は鈴と並れば多い鈴い

蓋も又ちがう物なれば亦ちがう並れば形鈴

を二尺の浦乃枕刃は亦ちがう並ちがう形しを枕

箱の枕刃形り仕く鈴い和方は二尺の浦乃

ちがう合せ方なり又常陸の国の鹿島の枕刃い

ちがう並ちがう並が方の枕刃形り是なれば

ちがうなりしちがう並ちがう形しちがうを古人の発句

は蛇蛇や鹿島の鹿島と並べて鹿島の芭蕉の名

物なれば鹿島の枕刃は並べ方多なる形り又玉鉾

とい道とちがうなれば並べ方の枕刃形り志る

小連ちがう発句は玉鉾の花柿と並べ方花柿

云もの小常は道を作りくちがうちがうものなれ

ばらく玉鉾と並べ多なり是い枕刃を作るい句

俳諧の力なり仕を並べの六七を能合点して稚

くの枕刃を並べくも書しうちを

句の留り山東ゆる文句やうを切字云記

一弦を句の留りは句ゆるは山椒魚なとの上を

ほ記を句の終りは並べ仕は功なはくちをして

を切りくは云新作り仕六二句ちがうして作用

なるちを蕉門はは例のちがはなり

発句の姿伝作並べ変発句の心得

第一家

花すゝき　おもし　鶏頭を　実　合せ　玄丸

玉箒　花の　ごとく　はつ　句　家　紫色　ふく　脇　仕　なりと

位

外の花の絶間　ふらん　園の　門

句の位　常　常　なり　と

菜

十重　ゴ　もい　移　なり　母　秋の風　許六

鶏　なり　と

わたし

名　も　寂入　て　右　名　金　の　湖

細　なり　と　れ　し　なり　位　句　を　味　し

多別　なり　と　し　又

雲の　名　に　業　て　や　は　の　嘉　年　残

は　句　業　し　や　は　風　情　な　し　業　り　し　て　は　句

な　な　し　て　の　位　名　を　金　な　り　と　又

腰　物　に　桂　の　さ　は　位　ち　か　玄　句

仕　は　句　姿　を　は　ち　る　と　ば　れ　業　句　集　る

は　位　物　り　さ　は　桂　と　わ　り　を　玉　句　り　て　右　門

句　を　門　分　中　の　郭　に　は　句　腰　物　に　桂　と　は　を　業

ほ　ど　ず　て　貴　切　な　り　し　詠　な　り　し　と　き　玄　丸

答　て　く　を　は　句　貴　切　な　を　は　し　し　な　り　し　腰　物

ふ　さ　は　桂　と　て　は　句　の　姿　も　心　も　と　な　し　し　ど

い　ふ　と　り　れ　は　桂　の　さ　れ　や　う　る　風　情　は　実　に　人

の腰物ふさわしからぬ事なれども、ふと自
分ながらもとれば腰物ばかりにて、腰物は拵
のさぶりあるべしとて、ひろうとて差入されば
大さ沢山なる拵出来、大坂の拵一本
ひとしきりなる腰ものなれば、ひとしきり
らくふうの染いかたとうとうとて
のと思案ありて、人きさて御しらべきも
のを拵傳受ふかさて御夢ばり世ふ八
ものを拵傳受ふかさて